

西アジア新石器文化の防風壁・防風策

藤井純夫

Windbreak Walls and Devices in the Neolithic Near East

Sumio FUJII

西アジア新石器文化の住居遺構には、この地域特有の強い卓越風から屋内の空間を保護するための様々な工夫が施されている。最も代表的なのが、出入口を囲う各種の防風壁（windbreak walls）である。本稿では、この防風壁の成立と変遷について検討した。その結果、1) 先土器新石器文化Aの段階で、円形住居に固有の両袖タイプ防風壁が成立した、2) このタイプの防風壁はレヴァント南部の先土器新石器文化Bに継承され、妻入り型矩形住居に伴う前庭タイプの風除空間を形成した、3) 一方、レヴァント北部以東の地域では平入り型矩形複室住居が主流となり、これに適した屈折動線型の風除空間が形成された、4) 後期新石器文化から銅石器文化においても、こうした二つの流れが踏襲されたが、5) バーディアでのみ、先土器新石器文化A伝統の両袖防風壁が永く用いられた、6) ただし、ヨルダン南部における後期新石器文化の葬祭遺跡カア・アブ・トレイハ西では、定住農耕文化圏の系譜を引く矩形遺構および片袖防風壁が建造され、この地域における遊牧化の経緯を暗示している、ことが判明した。また、これらのことから、防風壁および各種の防風策が、西アジアの新石器化・遊牧化を追尾する際の重要な鍵になることが分かった。

キーワード：防風壁、新石器文化、遊牧、バーディア、カア・アブ・トレイハ西

This paper discusses the origin and techno-typological transition of windbreak walls, architectural devices for protecting indoor space from the prevailing wind, in the Neolithic Near East. Current evidence suggests that: 1) a pair of short, protruding walls appeared in conjunction with small, round structures in the Levantine PPNA as the initial type of windbreaks; 2) these were subsequently incorporated to rectangular structures with a straight-line approach in the southern Levantine PPNB, leading to the formation of semi-open, straight-line approach windbreak forecourts or fore-rooms; 3) the northern Levantine and Zagros PPNB, on the other hand, developed rectangular structures with a bent-axis approach, which in turn was responsible for the development of bent-axis windbreak forecourts and fore-rooms; 4) these two trends, though partly transformed, were inherited to later periods; 5) in contrast, the Badia, arid peripheries of the prehistoric Near East, witnessed the long continuation of simple, protruding windbreaks of the PPNA-tradition; 6) the only exception to this is Layer 4 windbreak walls at Qa' Abu Tulayha West, a Late Neolithic funerary center in southern Jordan, where one can see rectangular (pseudo-) houses attached with a curvilinear, one-sided windbreak wall - an indication that the pastoral nomadism in southern Transjordan, mostly likely, was established through infiltration from agro-pastoral settlements to the west and northwest. Thus, windbreak walls and various devices related to them proved to be a key to tracing the Neolithization and nomadization of the Near East.

Key-words: windbreak wall, Neolithic, pastoral nomadism, Badia, Qa' Abu Tulayha West

はじめに

防風壁とは、「屋内への風の侵入を遮断または緩和することを主目的に付設された、出入口付近の独立壁」のことという。西アジアのステップ・沙漠地帯ではしばしば突風が吹くが、これに対する建築上の備えが、この防風壁である。

筆者が防風壁の存在とその意義に初めて気付いたのは、カア・アブ・トレイハ西遺跡（Qa' Abu Tulayha West）の第3次発掘調査（2000年夏）においてであった。後述するように、この遺跡の第4層矩形遺構群の出入口には、曲線的な独立壁がしばしば付帯していた。この壁面が防風壁であることは、その形態と位置から直ちに了解されたが

(藤井 2001a: 45; Fujii 2000a: 160)、確認当初はきわめて特異な事例としか考えていなかった。しかし、その後、類例を探しているうちに、この種の防風壁が西アジアの新石器文化に広く認められること、にもかかわらず全く注目されていないことに気付いた。西アジア先史・古代建築史の第一人者であるオランシュの著した事典も、通風設備(aération, wind catcher, malqaf)には言及しているが、防風壁については何ら触れていない(Aurenche 1977, 1981a)。他の辞典・総説類も、同様である(小林 1959; Aurenche 1981b; Forest 1983a; Kubba 1987; Leick 1988)。唯一、ダメルジが扉両脇の「櫓・張り出し・ニッチ」に言及しているが(ダメルジ 1987: 65-86)、これはあくまでも建築装飾要素としての言及であり、防風機能に着目したものではない。

そこで本稿では、西アジア新石器文化における防風壁および各種の防風設備についてまとめてみたい。対象とする地域は、レヴァント地方の南部・北部、バーディア、およびザグロス地方(メソポタミア平原含む)である。アナトリア高原およびイラン高原の遺跡については、一部のみ言及する。対象とする時代は、新石器文化を挟む前後約7000年間、つまりナトゥーフ文化から銅石器文化までである。

本稿の構成は、以下の通りである。まず最初に防風壁の定義を再確認し、カア・アブ・トレイハ西遺跡の事例と、それに関連した民族例について簡単に紹介する。次に、各時代・各地域における防風壁・防風策について、個別に検討する。最後に、これらの作業を総括するとともに、カア・アブ・トレイハ西遺跡防風壁の系譜関係などの幾つかの問題について考察したい。

西アジア新石器文化の住居遺構については、これまで様々な角度から検討が加えられてきた。これを防風壁という新たな視点から見直すと、どのようなことが言えるであろうか。また、そのような視点からカア・アブ・トレイハ西遺跡の第4層遺構群を再検討すると、どのようなことが分かるであろうか。

防風壁とは

冒頭でも述べたように、防風壁とは、「屋内への風の侵入を遮断または緩和することを主目的に付設された、出入口付近の独立壁」のことをいう。家屋の外壁すべてにもともと防風の機能が備わっているわけであるが、ここでは、1) 出入口からの風の侵入を防ぐことを主目的に、2) 外壁とは別個に付設された、3) 屋根の架からない(あるいは家屋本体の屋根とは異なる小型の屋根しか架からない)独立の壁面、を防風壁と定義する。

住居の外壁は、この3つの定義すべてに反するので、防

風壁とは言えない。また、屋外の炉や竈などに付帯する風よけの壁面も、定義1)を満たさないことを理由に、ここで言う防風壁からは除外される。ただし、そうした壁面が出入口の近くにあって屋内の防風をも兼ねている場合は、防風壁に含めることとする。

ところで、屋内への風の侵入を遮断・緩和するための工夫には、防風壁以外のものもある。例えば、出入口付近の動線を屈折させたり、前庭・前室などの風除空間¹⁾を設たりするなどの措置が、それである。単純な方法だが、出入口を小さくするだけでも一定の防風効果が得られる。このほか、家屋の囲いにも一定の防風の機能が組み込まれている。本稿の後半では、こうした防風策一般についても併せて検討したい。

カア・アブ・トレイハ西遺跡の防風壁

カア・アブ・トレイハ西遺跡は、ヨルダン南部のフリント沙漠(ハマーダ Hammada)に立地する初期遊牧民の大規模葬祭遺跡である。1997年から2002年まで、計6回の調査が実施された(藤井 1998a; Fujii 1998ほか)。この遺跡では、第3層(前期青銅器時代)および第4層(後期新石器時代)の、二つの文化層が確認されている。

防風壁は、第4層の北東遺構群で確認された(図1)。矩形遺構の出入口(この地域の卓越風である北西風を避けるために、その対偶の東南隅に設けられている)を北東側から丸く囲っているのが、問題の防風壁である。北遺構列のユニットC、中央遺構列のユニットA、C、E、Fで、計5件の防風壁を実際に発掘した。このほか、北遺構列のユニットEや中央遺構列のユニットIの出入口付近でも、類似の石列を認めた。従って、カア・アブ・トレイハ西遺跡では、少なくとも7件の防風壁が確認されることになる。その形態はいずれも、出入口を片側から囲う、曲線的な片袖壁²⁾であった。

最も典型的な事例として、北遺構列ユニットCの防風壁を紹介しておこう(図2-1, 2)。このユニットは矩形プランの地上式建造物(外法で幅約4.5m × 奥行き6.5m)であり、石灰岩の2列立石を埋め込んだ細長いマウンド(幅約30~70cm × 高さ約15~20cm)を壁面の基礎としている点に特徴がある(2列立石マウンド構造)。上部構造は不明であるが、2列立石の間に葦や小枝などの植物質軟質建材を埋め込み、これを中央で束ねる擬似ヴォールト構造であったと想像される³⁾。構造的には、マーシュ・アラブの「葦の家(reed house)」がこれに近い(Thesiger 1964, 1991; 藤井 2001b)。一方、プランの面では、北西隅に2つの小区画、その対角線上の南東隅に幅1m未満の狭い出入口が、それぞれ設けられていた。防風壁(全長約4m)は、この出入口を北東側から大きく囲っている。保

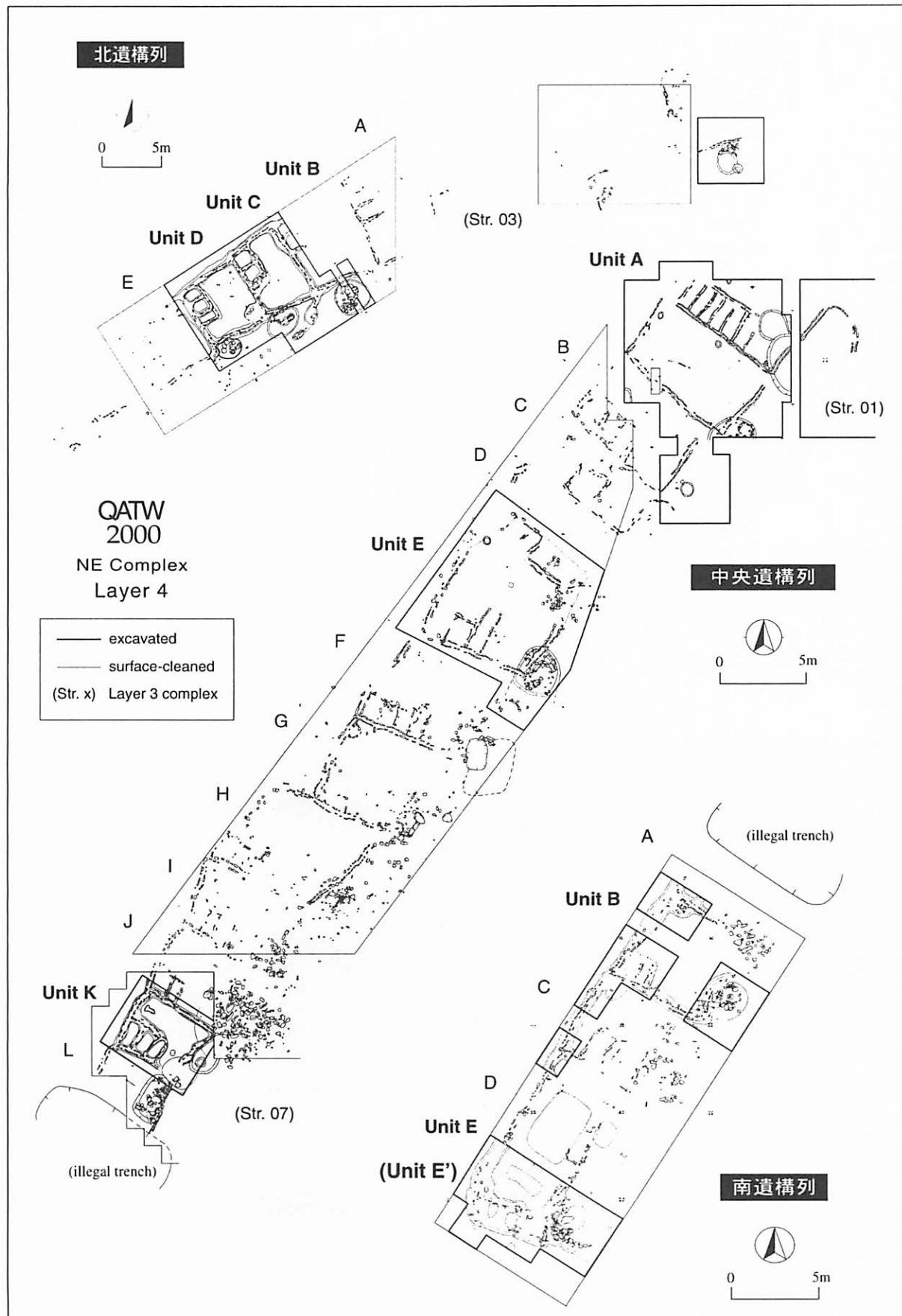


図1 カア・アブ・トレイハ西遺跡：第4層の遺構列 (Fujii 2001: Fig. 2)

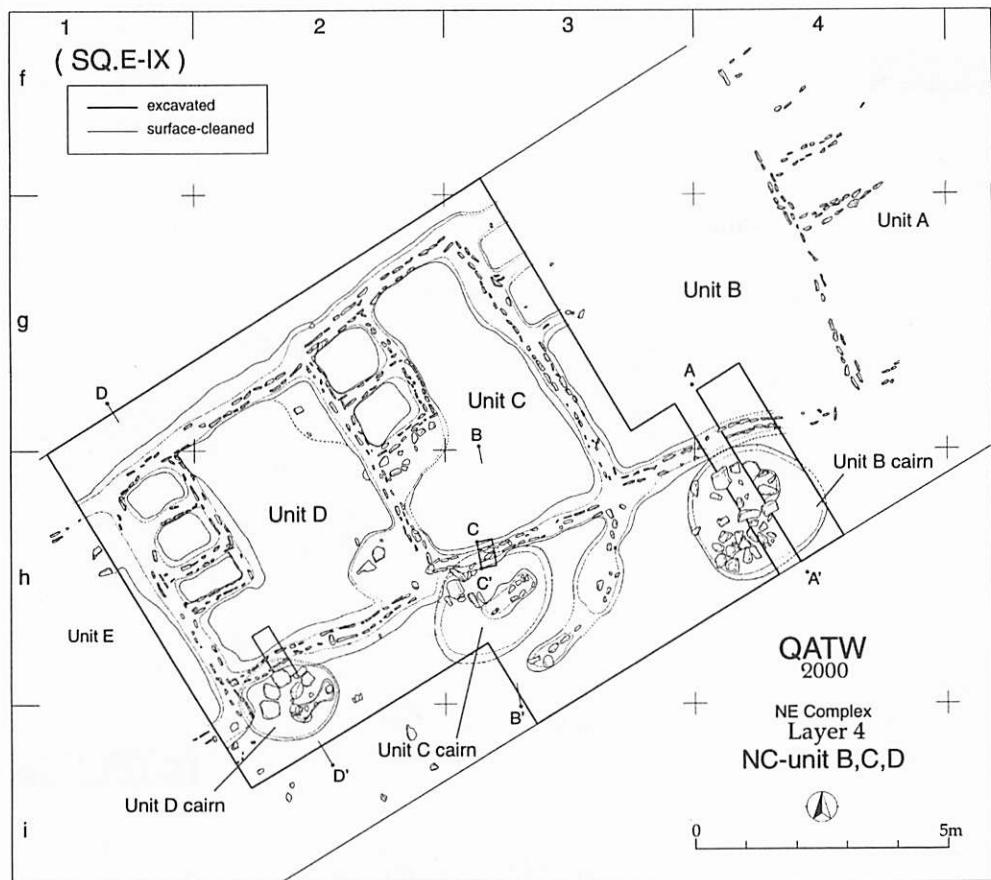


図2-1 カア・アブ・トレイハ西遺跡：北側遺構列ユニットC (Fujii 2001: Fig. 3)



図2-2 同写真 (筆者撮影)

存状態は良くないが、この部分にも2列立石のマウンド構造が認められた。なお、正面壁（ファサード）の南西隅には、基礎マウンドの一部を切り取る形で、ピット型のケルン墓が1基設けられていた。

ところで、カア・アブ・トレイハ西遺跡の第4層遺構群は、「擬集落（pseudo-settlement）」を形成している（藤井2002a; Fujii 2000c, 2001, 2002c）。「擬集落」とは、実際の居住を伴わない、ケルン墓に付帯する装飾的な住居、つまり「擬住居」の連結体のことと言う。当然、上記の防風壁も疑似的な設備ということになるから、実際に防風の機能を果たしていたかどうかは疑問であろう。しかし、「擬住居」のモデルとなった本来の建造物においては、防風壁として機能していたと考えてまず間違いない。建造物本体の壁面と同様に、2列立石の間に葦などの軟質壁材を埋め込み、これによって出入口からの風の侵入を緩和していたものと思われる。この点でも、マーシュ・アラブの「葦の家」が参考になる（Thesiger 1964: Pl. 14; 1991: Pl. 63）。場合によっては、この部分の軟質壁材をファサード側の壁材と共に束ねて、片ヴォールト状の前庭的な風除空間を形成していた可能性もある。いずれにせよ、北西からの卓越風を建物の背面で遮断すると同時に、出入口付近に発生する補償流や時折吹く別の角度からの突風に対しては、こうした防風壁で対応していたのである。無論、この防風壁に、日除けや目隠し、あるいは雨水の流入防止などの多様な機能が内包されていたことは言うまでもない。

他のユニットでも、同様のことが観察された。出入口は常に遺構の南東隅に置かれ、その北東側に、2列立石マウンド構造の曲線的な防風壁が付設されていた。なお、中央遺構列ユニットAの防風壁は、その内側に小型の屋外炉を1基伴っていた。この場合、防風壁は、屋内の防風のみならず、屋外炉の防風をも担っていたことになるであろう。炉との共存という点で、本例は防風壁の機能を再確認させてくれた事例である。

以上のことから、カア・アブ・トレイハ西遺跡（およびその原型となった本来の集落）では、沙漠の卓越風から室内の空間を保護するための防風壁が出入口に付設されていたことが確認できる。その防風壁は、2列立石マウンド構造の矩形遺構の南東隅、つまり卓越風の風下側に常に位置し、型式的には片袖タイプの防風壁であった。発掘した遺構の大半で確認されたことから、この遺跡においては防風壁は普遍的な付帯設備であったと考えられる。

フセイニーエ村の民族例

カア・アブ・トレイハ西遺跡で検出された防風壁の機能を再確認するために、第5次調査（2001年夏）の合間に簡単な民族考古学的調査を行った。場所は、同遺跡から約

20km北西に位置する人口数千人のアル・フセイニーエ村（al-Husayniyya）である。この村は、周辺遊牧民に対する定住化政策の一環として約20年前に創設された、比較的新しい集落である。住民の大半は、古くからヨルダン南部を根拠地としていたフウェイタート族（Huweitat）の遊牧民である。現在の生業も、主に遊牧。ただし近年では、農園、商店、ガレージ、あるいは各種公務員などの仕事に従事する者も増加している。この村で、以下のような事例を確認した。

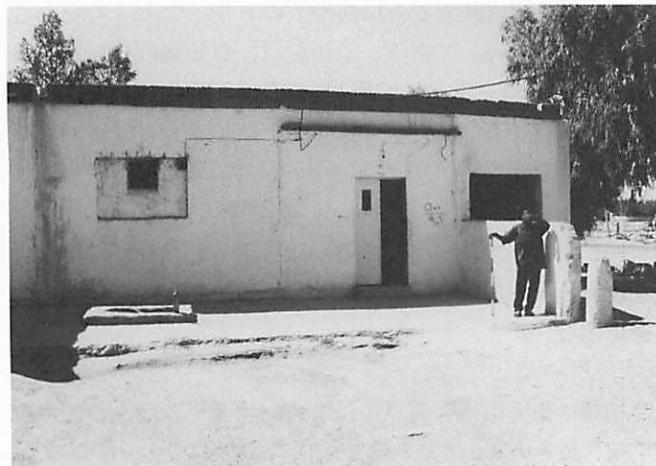
片袖壁：出入口の片側（この場合、北側）にのみ、低い袖壁（長さ約3m×高さ約1.3m）を設けたもの（図3-1）。このタイプの防風壁は、1件のみ確認された。居住者への聞き取りでも、「風避け」であるとの回答を得た（他の事例も、同様）。ただし、この防風壁は、出入口のみならず、その斜め前方に設けられた接客用の屋外炉にとっても重要とのことであった。本例は、カア・アブ・トレイハ西遺跡の防風壁に最も類似した事例である。異なるのは、出入口に対して直角かつ直線的に延びていること、建材にコンクリートを用いていること、だけである。なお、この家の家族は、シェイク（族長）一族に次いでいち早くこの村に定住した家族と言われている。村中で最も古い家屋の一つにこうした古い伝統が残っているのは、興味深い。

両袖壁：出入口の両側に、一対の短い袖壁を設けたもの（図3-2）。このタイプの防風壁は、数件確認された。いずれの場合も、家屋本体の屋根とは異なる小型の屋根を伴っていた。ただし、ファサード部分からの突出はわずかで、どの事例も1m未満であった。このタイプの防風壁は、出入口の装飾効果や壁面の構造強化機能をも併せ持っているものと思われる。

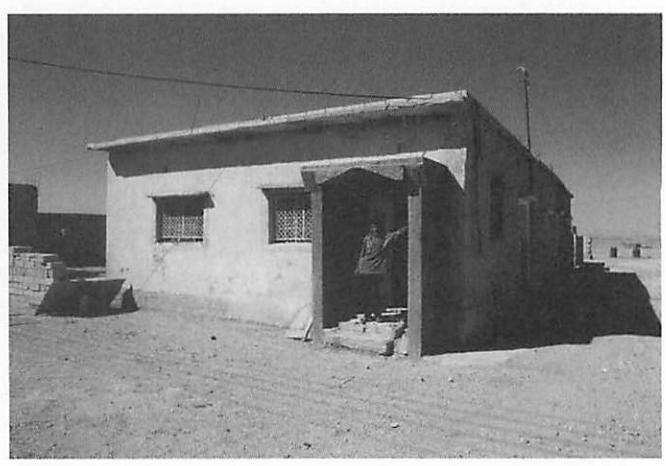
前庭壁：家屋前方の空間を、「コの字型」の壁面で大きく囲ったもの（図3-3）。つまり、前庭（forecourt）の壁面に家屋全体の防風効果を付託したものと言う。このタイプの防風壁は最も一般的であり、多数確認された。

家屋周壁：前庭のみならず、家屋の四隅を「口の字型」の壁面で大きく囲ったもの。このタイプの防風壁も、多数確認された。

片手間の調査ではあったが、上記4種の防風壁を確認することができた。フセイニーエ村で防風壁が通有の施設となっていることが、了解いただけるであろう。ただし、前庭壁と家屋周壁の二つについては、防風効果を含めた多様な回答があったことを指摘しておかねばならない。例えば、不審者の侵入防止や家畜用の囲い、あるいは各種作業場の形成などの回答がそうである。聞き取り対象者の多くは防



1. 片袖壁



2. 両袖壁



3. 前庭壁面



4. ガードのテントと第4層遺構群



5. テントの防風幕



6. テントの防風幕

図3 フセイニーエ村の防風壁と遊牧民テントの防風幕 (筆者撮影)

風効果にも言及したが、その点を指摘しない人もあった。ただし、防風はどうなのかと聞くと、もちろんそれもある、とのことであった。このあたりはやや曖昧と言わざるを得ないが、多様な効果を持つ壁面だけに回答にはらつきが生じたのはある意味で当然であろう。しかし、面白いことに、このタイプの大型防風壁を備えた家屋には、袖壁タイプの簡易防風壁は伴っていなかった。逆に、袖壁タイプの簡易防風壁を備えた家屋には、上記のような大型防風壁は伴っていなかった。このことからすると、たとえ副次的にせよ、前庭壁面や家屋周壁に防風機能が組み込まれていることは明らかであろう。事実、居住者の多くはそう述べていた。

フセイニーエ村は、カア・アブ・トレイハ西遺跡から最も近い位置にある集落である。自然環境も、同遺跡と大差ない。遊牧中心という点で、基本的な生業も共通している。そのフセイニーエ村で上記のような各種の防風壁が認められるということは、たとえカア・アブ・トレイハ西遺跡との間に大きな時代差が介在するにしても、やはり重要であろう。

この時代差をいくらか埋める資料もある。遺跡調査で雇用した（フセイニーエ村出身の）ガードのテントが、それである。面白いことに、彼らのテントは第4層遺構群と並行して常に南東向きに建てられていた（図3-4）。これは、先述したように、北西からの卓越風をテントの背面で遮断するための工夫であるが、テントの前面に発生する補償流や時折吹く別の角度からの突風に対しては、テント本体とは別の幕を添付して対応していた（図3-5, 6）。その添付位置は、カア・アブ・トレイハ西遺跡第4層遺構群の防風壁と同じく、常に南東隅であった（本例では南西隅にも別の天幕が加えられているが、これは午前中の日除けが主目的であり、午後になるとしばしば取り外される）。カア・アブ・トレイハ西遺跡の発掘例とフセイニーエ村の民族例——両者は、こうしたテントの防風幕を介して互いにつながっているように思われる。

西アジア新石器文化の防風壁・防風策

カア・アブ・トレイハ西遺跡やフセイニーエ村で見たような防風壁の類例は、西アジア各地の新石器文化遺跡でも認められる。本章では、これらの事例について、時代・地域ごとに通覧する。（なお、本章では、図版を引用しない遺跡の参考文献だけを本文中に表記した。図版を引用した遺跡の参考文献については、重複を避け、本稿末尾の図版引用リストに列記した。）

1. 終末期旧石器文化

終末期旧石器文化の遺構確認件数は、まだ少ない。そのため、防風壁の有無についても不明な点が多い。唯一、その可能性があるとすれば、ヨルダン渓谷北部低地のナトゥ

ーフ文化遺跡AIN・マラッハ（Ain Mallaha）で確認された大型円形遺構（26号遺構）の出入口であろう（図4-1）。このわずかに突出した出入口は、先土器新石器文化Aの主流となる両袖タイプ防風壁の祖型と見なすことができる。そのまた祖型は、ガリラヤ湖南西岸の終末期旧石器文化遺跡オハローII（Ohalo II）に見ることができるであろう（Nadel 1994: Fig. 2; 藤井 2001c: 図11）。このほか、イスラエル海岸平野のナトゥーフ文化遺跡エル＝ワド洞窟（el-Wad）のテラス部分では、長さ約8.5mの石垣が確認されている（Garrod and Bate 1937: 11-12, Plate III; Valla et al. 1986: 22, Fig. 1）。この石垣は、北西方向に開口する洞窟を卓越風から保護するための衝立タイプの防風壁であった可能性がある。

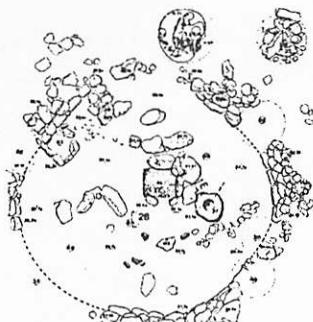
2. 先土器新石器文化A

この時期から、本格的な住居建築が増加する。それに伴い、防風壁の確実な事例も現れる。その典型が、死海北西岸の遺跡イエリコ（Jericho）の円形遺構に付帯する、左右一対の短い袖壁である（図4-2, 3）。これは、フセイニーエ村で見たのと同様の、ただし円形遺構に伴う、おそらくは天井の低い、「躊躇口」状の両袖タイプ防風壁であろう。系譜的には、先述のAIN・マラッハの事例の延長線上にあるものと思われる。このタイプの防風壁は、イスラエル海岸部のナハル・オーレン（Nahal Oren）でも確認されている（図4-4）。ただし、この場合は突出部の長さが短く、その意味でAIN・マラッハの事例により近いと言えよう。このほか、死海北西岸のネティブ・ハグドウ（Netiv Hagdud）では、前室的な空間を伴う大型の楕円形遺構が確認されている（図4-5）。この前室部分は、両袖壁に囲まれた半開放的な風除空間であった可能性がある。なお、先述のイエリコでは、2件の円形遺構を直行して組み合わせた事例も少数ながら認められる（図4-6）。2件の遺構が同時期であるとするならば、これは屈折導線型の防風策と言えるであろう。

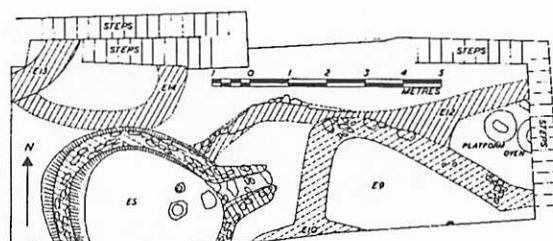
先土器新石器文化Aの主流である両袖タイプの防風壁は、レヴァント北部のテル・ムレイビット（Tell Mureybet）の第II期でも確認されている（図4-7）。ただし次のIII A期では、小型の前庭を設け、その凹みによって風を防ぐという新たな工夫がなされている（図4-8, 9）。類例は、同時期のジュルフ・エル・アフマル（Jerf el-Ahmar）でも確認することができる（図4-10）。これらは、ネティブ・ハグドウで見たのと同様の、前庭・前室的風除空間による新たな防風策と言えるであろう。後述するように、レヴァント北部の先土器新石器文化Bで主流となるのが、このタイプの防風策である。

一方、バーディアでは、ジラート7（Jilat 7: Garrard et al. 1994: 75-77）やジャバル・クエイサ（Jabal Queisa:

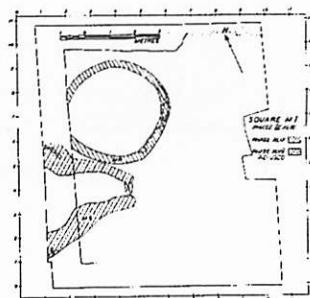
レヴァント南部



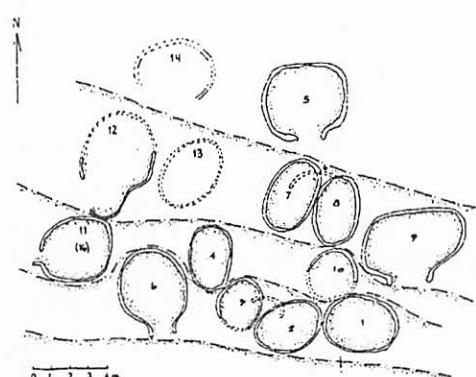
1. アイン・マラッハ



2. イエリコ (EI, II, V区)



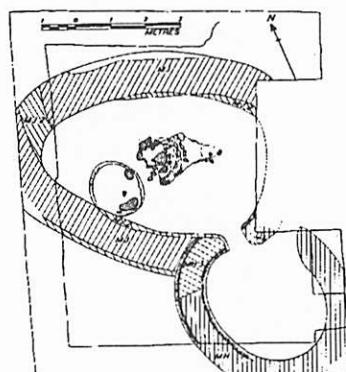
3. イエリコ (MI区)



4. ナハル・オーレン



5. ネティブ・ハグドゥド

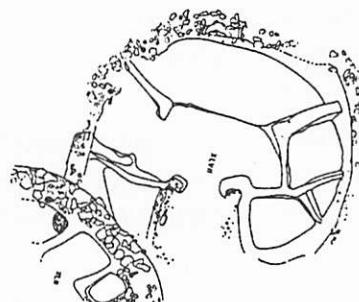


6. イエリコ (MI区)

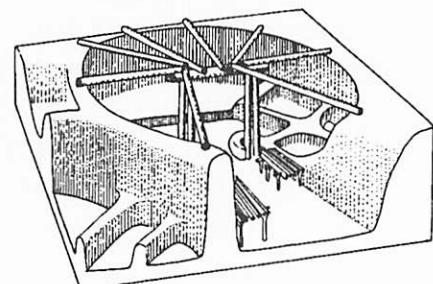
レヴァント北部以東



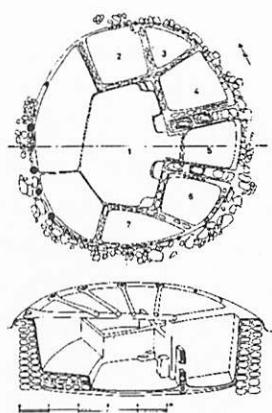
7. テル・ムレイビット II



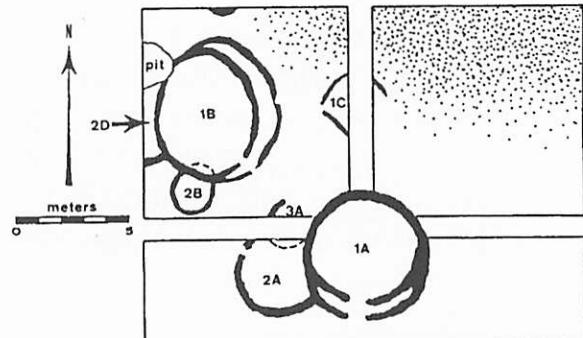
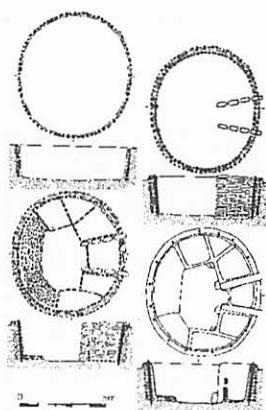
8. テル・ムレイビット IIIA



9. 同復元予想図



10. ジュルフ・エル・アフマル



11. ハラン・チェミ

図4 先土器新石器文化Aの防風壁・防風策（縮尺・方位不同）

Kuijt and Chesson 1994; Henry 1995: 345-352)など二三の候補を除いて、この時期の遺跡はまだ確認されていない。タウルス・ザグロス方面でも、この時期の遺跡調査件数は少ない。唯一、可能性があるとすれば、チグリス最上部に位置するハラン・チェミ (Hallan Çemi) の円形遺構であろう (図 4-11)。ただし、この遺構の二重正面壁には単なる増改築の可能性もあるので、防風壁といえるかどうかは確実ではない。

3. 先土器新石器文化 B

先土器新石器文化 A の主流であった両袖タイプの防風壁は、レヴァント南部の先土器新石器文化 B に継承されている。その一例は、ヨルダン南部山岳台地のベイダ (Beidha) 第 VI 層で発掘された「鉢の巣状円形遺構 (beehive structures)」に見られる。18 号遺構 (中央) の出入口に付設された左右一対の突出壁は、両袖タイプ防風壁の典型であろう (図 5-1)。48 号遺構 (右端) では、片袖タイプの防風壁も追加されている。

しかし、先土器新石器文化 B の中期以降になると遺構全体の大型化・矩形化が進み、これに伴い、防風壁のあり方にも変化が生じている。レヴァント南部の場合、妻入り型矩形遺構へのシフトが進行したが、その典型が「桟橋型矩形遺構 (ピア・ハウス pier house)」と総称される多区画矩形遺構である (Byrd and Banning 1988; Banning 1996: 169-170; 藤井 2001c: 144-146, 229)。このタイプの遺構では、左右の側壁がしばしばファサードから突出して、前庭的な風除空間を形成している (図 5-2 ~ 6)。この前庭的風除空間は、先土器新石器文化 A に見られた両袖タイプ防風壁からの (遺構矩形化・大型化に伴う) 発展型とみなすことができる。ただし、左右両側壁の突出具合は様々であり、1) 両側が等しく突出して、前庭的風除空間を左右から囲む典型的な両袖壁となっているもの (イエリコ)、2) 左右の突出が異なり、実質的には片袖タイプの防風壁となっているもの (ユフタヘル)、3) 片側から延びた壁面が途中から屈折して、出入口をも覆う大型の防風壁となっているもの (ベサムン)、などのバリエーションが認められる。こうした事例と一線を画すのが、先土器新石器文化 B の末期に出現した中庭式の大型複合遺構である。バスタの場合、「コの字型」の部屋配置によって半開放的な中庭が形成され、これによって各部屋の間接的な防風が図られている (図 5-7)。

一方、バーディアでは、この時期になってようやく遺跡が確認されるようになる。しかし、そこでは、先土器新石器文化 A 伝統の、出入口だけを直接保護する、幅の狭い、おそらくは「躊躇口」併用の、両袖タイプ防風壁が依然として用いられている。例えば、ネゲブ地方南部に位置するワディ・トゥベイク (Wadi Tbeik) の防風壁がそうであ

る (図 5-8)。類例は、ヨルダン内陸部のワディ・ジラート 7 やドゥウェイラ (Dhuweila) の第 2 期、あるいはヨルダン南部のジャバル・アムード (Jabal Amud) でも報告されている (図 5-9 ~ 12)。ドゥウェイラの場合、風上側の防風壁は全長約 6m にも達しており、出入口のみならず、その先端部風下側に設けられた屋外炉のための風よけにもなっている。これは、先述したカア・アブ・トレイハ西遺跡中央遺構列のユニット A の防風壁と同じであり、興味深い。なお、こうした事例とは別に、シナイ半島東部のアイン・カディス I ('Ein Qadis I) では、曲線的な片袖壁が報告されている (Gopher et al. 1995: Plan 2)。ただし、本例は戸口とは逆の方向に湾曲しているので、防風壁かどうかの判断は分かれるであろう。

レヴァント北部も、固有の様相を示し始める。この地域では平入り型矩形複室遺構へのシフトが進行していたが (藤井 2001c: 144-146)、こうした動向と、ムレイビット III A 期に導入された前庭型の防風策とが合わさって生まれたのが、「前庭・前室的な風除空間による屈折動線型の防風策」である。事例は、ムレイビット III B 期、シュエイク・ハサン (Sheikh Hassan)、テル・アブ・フレイラ (Tell Abu Hureyra) などに見ることができる (図 5-13 ~ 15)。この種の防風策は先土器新石器文化 B 中・後期にも踏襲され、例えば、ユーフラテス上流域のジャフェル・ホユック (Cafer Höyük) や同中流域のブクラス (Bouqras) などにも採用されている (図 5-16, 17)。なお、ブクラスでは、こうした出入口の外側に片袖タイプの防風壁を別途追加した事例もある。興味深いのは、同じく集落の西側に位置する遺構群の中でも、出入口を北西に向けた遺構にだけ片袖タイプ防風壁の追加が認められる、という点である。これは、沙漠の卓越風 (北西風) を防ぐための二重の措置であろう。このほか、レヴァント北部としてはやや異例の防風壁として、ユーフラテス上流域のネワリ・チヨリ (Nevalı Çori) 第 III・IV 層の神殿址に伴う曲線的な両袖壁 (ただし復元図に基づく) を指摘しておきたい (図 5-18)。

タウルス・ザグロス方面の先土器新石器文化 B を特徴付けているのも、この「前庭・前室的な風除空間による屈折動線型の防風策」である。類例は、シンジャール平原のテル・マグザリーヤ (Tell Magzaliyah) や、ジャルモ (Jarmo) 第 II 発掘区第 5 層の矩形複室遺構などに見ることができる (図 5-19, 20)。ただし、例外はある。ザグロス地方の南端、デヘ・ルーラン平原に位置するアリ・コッシュ (Ali Kosh) のブス・モルデ期 (Bus Mordeh) では、意外なことに、両袖タイプの防風壁が確認されている (図 5-21)。ちなみに、この遺構の外部には炭化種子を多量に含む灰層が堆積していたが、その分布は出入口の中程で止

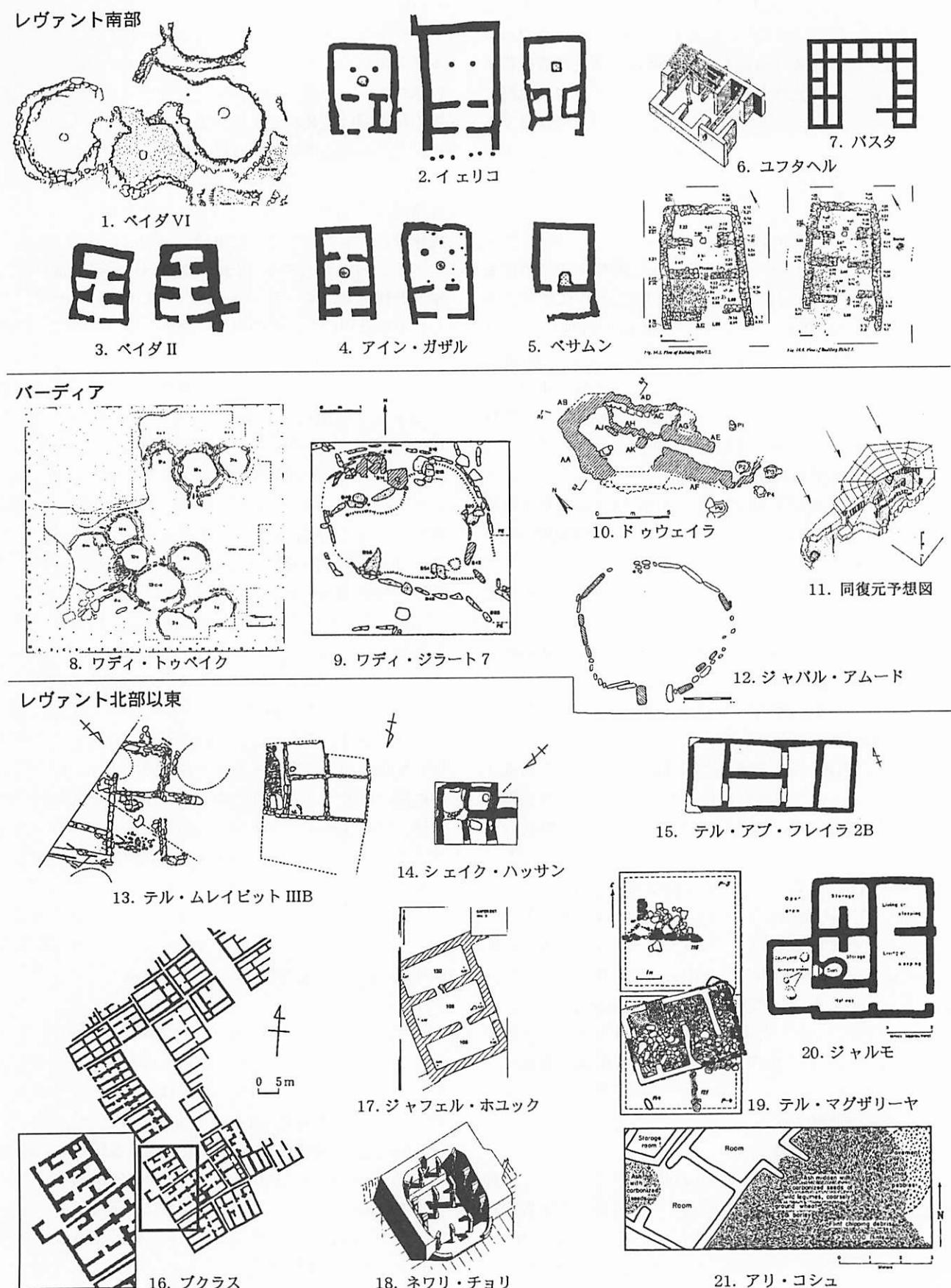


図5 先土器新石器文化Bの防風壁・防風策（縮尺・方位不同）

まっており、室内にまでは及んでいない。このことから、戸口自体の密閉度はやや低いにしても、防風壁自体は一定の効果を上げていたことが分かる。

4. 後期新石器文化

レヴァント南部では、先土器新石器文化Bに後続する紀元前6千年紀初頭からの約500年間を先土器新石器文化Cとし、それから同5千年紀中頃までの約1000年間を後期新石器文化と称している（いずれも非補正年代）。ここでは、この二つを併せて取り扱う。と同時に、レヴァント北部以東における同時期の諸文化（プロト・ハッスーナ文化からウバイト前期文化）についても、便宜的に後期新石器文化の名称で一括して扱う⁴⁾。

この時期のレヴァント南部では、「口の字型」の本格的な中庭式住居が出現している。ヤルムーク文化の標準遺跡であるシャアル・ハゴラン（Sha'ar Hagolan）は、その一例である（図6-1）。このタイプの遺構の場合、住居は一般に風上側に置かれ、その背面で卓越風を防ぐと同時に、中庭を囲む別の遺構群によって（風下側の）出入口を間接的に保護するという工夫がなされている。問題は風下側の遺構群であるが、この部分には主に貯蔵庫や作業場などの非居住遺構をおくことによって、出入口が風上側を向くという不利な条件をある程度相殺している（無論、風上側の住居遺構が風よけとなっていることは言うまでもない）。なお、こうした中庭式遺構とは別に、従来の防風壁をそのまま踏襲した事例も認められる。例えば、イスラエル海岸部の先土器新石器文化Cの遺跡アトリット・ヤム（Atlit Yam）の矩形単室遺構には、両袖タイプの防風壁が伴っている（図6-2）。また、ヨルダン渓谷東側斜面の後期新石器文化遺跡タバカト・アル・ブーマ（Tabaqat al-Buma）の単室矩形遺構には、片袖タイプの防風壁が付設されている（図6-3）。類例は、ヨルダン高原のヤルムーク文化遺跡AIN・ガザル（'Ain Ghazal）でも確認されている（図6-4）。

これに対して、遺構矩形化・複室化の波がほとんど及ばなかったバーディアでは、先土器新石器文化A伝統の両袖タイプ防風壁が依然として主流を占めている。ヨルダン内陸部玄武岩沙漠地帯のエル・ギルカ（el-Ghirqa）の事例は、その典型である（図6-5）。年代は確実ではないが、カア・メジャラ14j号遺跡（Qa' Mejala 14j）にも類例がある（図6-6）。この点、前述したカア・アブ・トレイハ西遺跡の（矩形遺構に伴う）曲線的な片袖壁（図6-7）は、むしろ異例の存在といえるであろう（その意味については後述する）。

一方、矩形化・複室化の進行したレヴァント北部以東の地域では、先に成立した「前庭・前室的な風除空間による屈折動線型の防風策」がより複雑な形となって展開してい

る。典型的な事例としては、サマッラ文化のテル・エッ・ソワン（Tell es-Sawwan）やウバイト0期のテル・エル・オウェイリ（Tell el 'Oueili）などに見られる3列構成的な遺構（tripartite structures）を挙げることができよう（図6-8, 9）。ただし、これ以外の防風壁も僅かながら認められる。例えばエリドゥ（Eridu）第16層の小型遺構（神殿址？）の出入口東側の突出壁は、神殿内部の目隠しであると同時に、片袖タイプの防風壁とも見なし得るであろう（図6-10）。これと同様の、ただし曲線的な片袖壁は、ウルミア湖南岸のハッジ・フィルーツ（Hajji Firuz）のB～D期でも多数確認されている（図6-11）。アナトリア高原のハジュラルVI層の矩形遺構にも、片袖または両袖タイプの防風壁が伴っている（Mellaart 1970: Fig. 7）。このほか、ハッスーナ文化の標準遺跡テル・ハッスーナ（Tell Hassuna）の第IV層では、出入口の正面に衝立タイプの防風壁があったことが復元図に示されている⁵⁾（図6-12）。

シンジャール平原周辺の後期新石器文化でもう一つ注目されるのが、「躰り口」の活用または併用である。例えばウンム・ダバギーヤ（Umm Dabagiyah）の出入口は、幅・高さ共に約50～70cmであったことが確認されている（Kirkbride 1975: 5）。ブクラスの場合（図6-13）は、約80×60cmであった（Akermans et al. 1981: 499; Kubba 1987: 151）。こうした「躰り口」の原型は、近年調査されたハブル上流のテル・セクル・アル・アハイマル（Tell Seker al-Aheimar）のC区（先土器新石器文化B）でも確認されている（西秋2002: 図1）。「躰り口」の存在は、遺構基礎部分のプランだけでは防風策の有無を正確に判断できない場合もあるという意味で、きわめて重要である。

このほか、ハラフ文化の指標遺構であるトロス（tholos）の突出壁にも防風壁の可能性がある（図6-14）。この突出壁は一般に住居または儀礼用建造物における方形室の壁面に相当すると考えられているが（常木1994: 412; 2002: 143-165）、様々な復元図（Mallowan and Rose 1935: Fig. 7-12; Kubba 1987: Fig. 111）が示唆しているように、この部分が防風効果を併せ持つ前庭であった可能性も否定できない。少なくとも極端に短い突出壁の場合は、出入口を護る両袖タイプの防風壁と考えてよからう（図6-15, 16）。このほか、特異な事例として、ハラバ・シャッタニ（Kharabeh Shattani）の衝立タイプ防風壁がある（図6-17）。

5. 銅石器文化

西アジア各地域の事情を捨象して、ここでは、紀元前5千年紀中頃から同4千年紀中頃までの約1千年間を銅石器文化と総称する。レヴァント南部の編年ではワディ・ラバ文化やガッスル・ベエルシェバ文化が、一方、メソポタミ

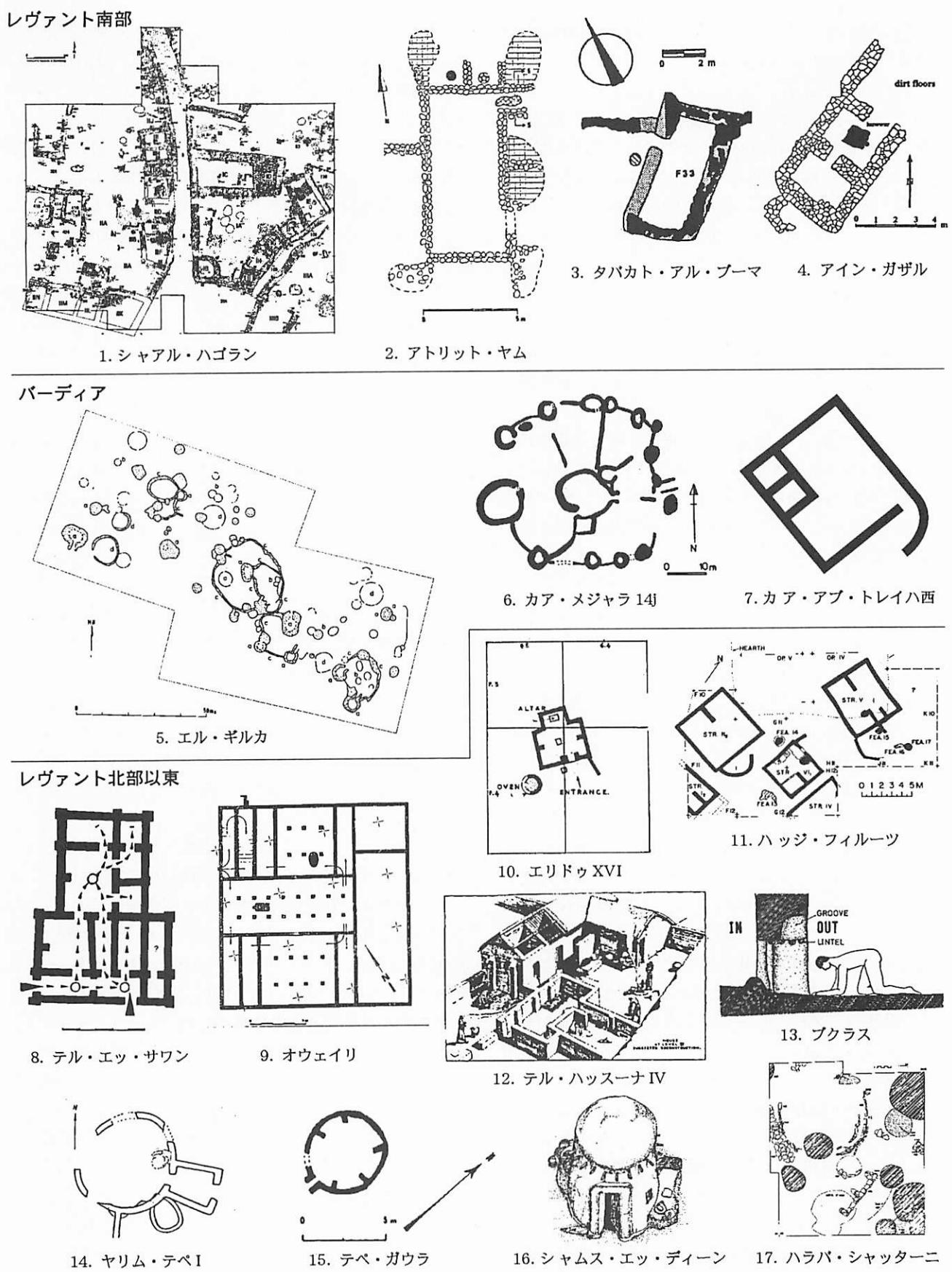


図6 後期新石器文化の防風壁・防風策（縮尺・方位不同）

ア編年ではウバيد後期文化が、これに相当する。

レヴァント南部では、後期新石器文化で成立した中庭式住居が継続している。その事例は、例えばレバノン海岸部のビブロス (Byblos: Dunand 1973: Fig. 77) や、フーレー低地のテル・テオ (Tel T'eo: 図 7-1) などに見ることができる。しかし銅石器文化の後半になると、これに代わって前庭タイプの防風策が主流となつたようである (図 7-2)。このタイプの防風策は、先土器新石器文化 B の主流であった前庭的風除空間のより大型化したものと考えることができよう。風除空間大型化の背景には、後期新石器文化から進行していた家畜管理・所有の家族分散化 (藤井 1998b: 111-113, 2002c) や、銅石器文化から顕著になった各種農作業の大型化・複雑化があったものと思われる。なお、こうした前庭への出入口と家屋への出入口とが直線上に並ばず、互いに方位を違えることが多い。その場合は、レヴァント北部以東に多い屈折動線型の防風策をも具備していることになるであろう。

一方、バーディアでは、この時代の遺跡はほとんど確認されていない。唯一、その可能性のあるヨルダン東部の岩陰遺跡テル・エル・ヒブル (Tell el-Hibr) に衝立タイプの防風壁があるが、岩陰内部の遺構との同時代性は必ずしも明確ではない (図 7-5)。そこで次の前期青銅器時代を参照すると、この時期のバーディア (特にネゲブ・シナイ地方) では、円形ないしは隅丸方形遺構を構成単位とする中庭式の環状連結遺構が、大きな特徴となっている (図 7-6, 7)。そこでは、中庭式住居に固有の防風策、つまり風上側に住居を置いてその背面で卓越風を遮断すると同時に、風下側には貯蔵庫などの非居住遺構を置くという工夫、に加えて、個々の出入口に「躊り口 (幅・高さともに約 50 ~ 70cm (Beit-Arieh 1992: 81))」が採用され、防風効果をさらに高めている。しかし、その一方では、バーディアに伝統的な防風壁も依然として継続している。例えばネゲブ地方のベエル・レシシム (Be'er Resisim) では、円形遺構の出入口を囲う片袖タイプの防風壁が確認されている (図 7-8)。この場合も出入口は小さく、幅約 0.5 ~ 0.60m × 高さ約 0.55 ~ 0.65m であった (Cohen 1992: 90)。このほか、特殊な祭祀遺構ではあるが、ゴラン高原のルジュム・エル・ヒリ (Rujm el-Hiri) で衝立タイプの防風壁が確認されている (Kochavi 1989: Fig. 5)。

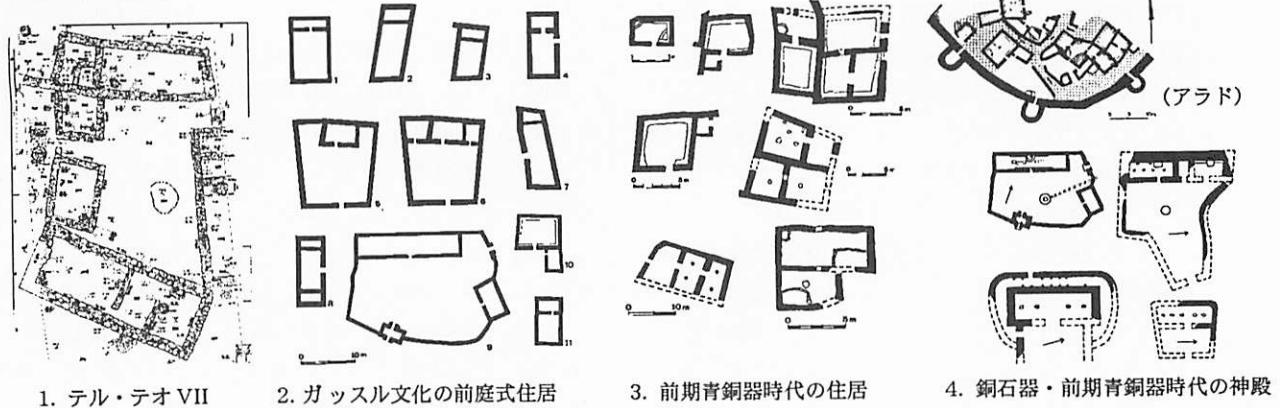
これと対照的なのが、定住農耕文化圏の動向である。そこでは、銅石器文化に盛行した前庭が衰退し、(前庭の最奥部に位置していた) 矩形遺構だけが建造されるようになっている (図 7-3)。その原因としては、例えばネゲブ地方のアラド (Arad) などで確認されているように (図 7-3 右上)、集落の周壁が構築されるようになったこと (そのために家屋単位の防風の必要性が低下したこと)、木製

扉の導入によって戸口自体の密閉度が向上したこと、などを指摘できるであろう。もう一つ、バーディアとの相関もある。定住農耕文化圏における前庭の喪失と、ステップ・沙漠地帯における中庭式環状連結遺構の出現——この見事な対比は、前者から後者への家畜スペースの委譲を示唆しているのではないだろうか。ステップへの遊牧的適応が前期青銅器時代に一段と本格化したことを考え合わせると、家畜空間の委譲には大きな意味があると思われる (藤井 1998b: 118, 2001c: 267-269)。なお、一般家屋とは対照的に、前期青銅器時代の神殿建築は前庭を保持し続けている (図 7-4)。これは、先行の時代における一般家屋の様式が後続の時代の宗教建築にしばしば踏襲されるという点で、興味深い。カア・アブ・トレイハ西遺跡の矩形遺構も、おそらくはこうした経緯を反映しているものと思われる。

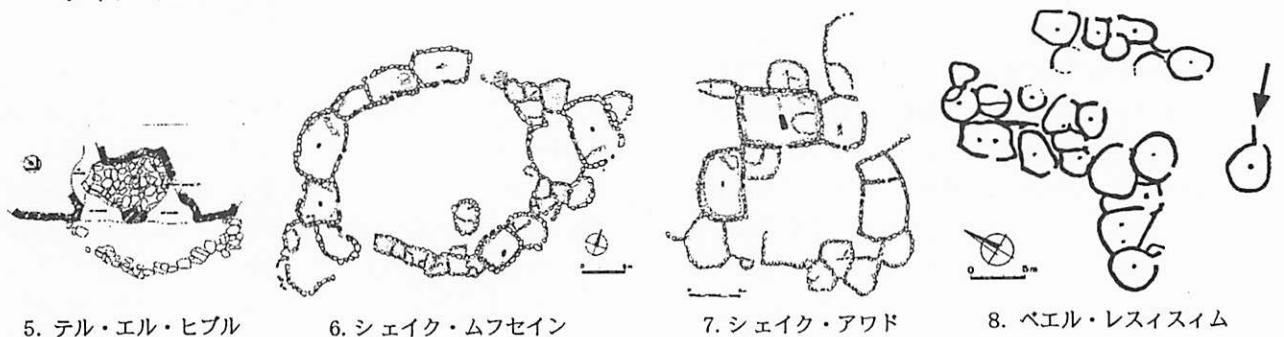
一方、レヴァント北部以東のウバيد後期文化は、すでに成立していた「前庭・前室的な風除空間による屈折動線型の防風策」を踏襲している。ただしこの時期には、十字型広間を中央に含むより複雑な形態の 3 列構成遺構 (tricruciform structures) がベースとなっており、風除空間の構造もその分だけより複雑化している (図 7-9 ~ 13)。(ここでは代表的なもののみを示した。類例については関連の文献を参照されたい (岡田 2000; 小泉 2001; 松本 1988, 1995; Forest 1983b; Kubba 1987; Margueron 1987, 1989))。このタイプの建造物の場合、家屋への出入口は、中央広間の外壁ではなく、そのすぐ左横の壁面に設置されることが多い。この出入口を入ってすぐの空間が、(しばしば階段室や半屋外調理場などを兼ねる) 前庭または前室である。ここから屈折して中央広間に入り、さらに屈折して左右の小部屋に入室するという動線であるが、この場合、先述の前庭・前室は屈折型の風除空間としても機能していくことになるであろう。これに独立壁を追加した事例もある。例えばテル・アバダ (Tell Abada) 第 II 層の遺構 A では、出入口の正面に衝立型の防風壁が追加されていた (図 7-13)。また、テル・ラシードでは、半円形の衝立タイプ防風壁が複数の家屋の出入口を囲っていた (図 7-14)。

防風壁および各種の防風策は、ウバيد・ウルク期の神殿建築にとって重要な視点となるであろう。例えば、テペ・ガウラ III 層 (北方ウバيد後期) の「北神殿 (Northern Temple)」や、エリドゥ VII 層 (ウバيد 4 期) の「第 7 神殿 (Temple Seven)」などに見られる屈折型の動線 (図 7-15, 16) は、神殿固有の秘匿性というだけではなく、一般住居における防風策との関係からも再検討されねばならない。神殿ではないが、テペ・ガウラ-XIA 層 (ウバيد・ウルク移行期) の大型円形遺構も、その出入口の形態だけを言えば、片袖タイプの防風壁と見なし得る (図 7-17)。同 III 層 (北方ウルク中期後半) の「西神殿

レヴァント南部



バーディア (主に前期青銅器時代)



レヴァント北部以東

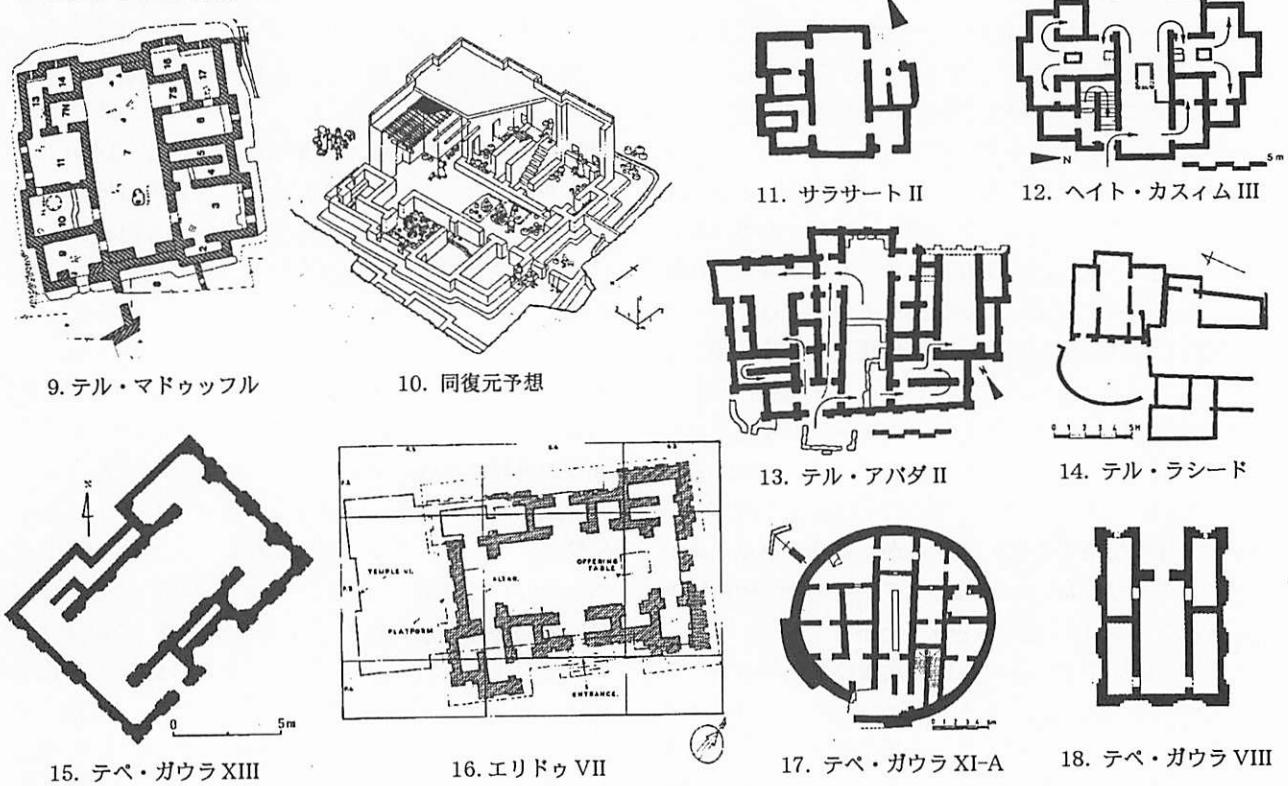


図7 銅石器文化の防風壁・防風策 (縮尺・方位不同)

(Western Temple)」の場合は、凹型の前庭による防風策と言えるかも知れない(図7-18)。

6.まとめ

以上述べたことを分布図および系統図(図8,図9)で総括すると、次のようなことが言えるであろう。

(1)先土器新石器文化A(図8-1)

この時期から防風壁の存在が明確になる。主流は、出入口の両側から突き出した、幅の狭い、おそらくは「躰り口」状の、両袖タイプ防風壁であった。ただしその後半には、これから派生したと思われる前庭タイプの防風壁も現れている。なお、この時期の防風壁は、いずれも円形あるいは楕円形遺構に伴う簡易の防風壁であった。

(2)先土器新石器文化B(図8-2)

定住農耕文化圏では、遺構の大型化・矩形化が進行した。これに伴い、防風壁の形態にも変化が生じたが、その内容はレヴァントの南北で異なっていた。妻入り型の矩形化が進行したレヴァント南部では、これに適した「直線配置の前庭的風除空間による防風策」が主流となった。一方、平入り型の矩形化が進行したレヴァント北部では、その動線の性質上、「前庭・前室的風除空間による屈折動線型の防風策」が一般的となった。同様の防風策は、ザグロス方面でも多く認められた。他方、バーディアでは先土器新石器文化A伝統の円形単室遺構が存続し、これに固有の両袖タイプ防風壁が永く用いられた。

(3)後期新石器文化(図8-3)

先土器新石器文化Bで明確化した地域性がこの時代にも踏襲され、レヴァント南部では「直線配置の前庭的風除空間による防風策」が、一方、レヴァント北部以東では「前庭・前室的風除空間による屈折動線型の防風策」が、それぞれ基本となった。ただし、これ以外の多様な要素も併存していた。レヴァント南部における中庭式住居(シャル・ハゴラン)、レヴァント北部以東における片袖または両袖タイプの防風壁(ハッジ・フィルーツやハジュラル)、シンジャール平原における「躰り口」の併用、ハラフ文化のトーロスに見られる両袖タイプの防風壁などが、それである。一方、この時期のバーディアでは、先土器新石器文化A伝統の小型円形遺構がなおも存続し、これに固有の両袖タイプ防風壁が依然として主流であり続けた。唯一、カア・アブ・トレイハ西遺跡で、片袖タイプ(しかも矩形遺構に伴う曲線的な片袖タイプ)の防風壁が認められた。

(4)銅石器文化(図8-4)

レヴァント南部で、大きな変化が認められた。大型の前庭を組み込み、時として屈折動線型の防風策をも併用する新たな防風策である。ただし、前庭系の防風策であるという点では、先土器新石器文化Bからの伝統を継承してい

ることになる。一方、レヴァント北部からザグロス・メソポタミアにかけての地域では、ウバイト後期文化の影響下で、3列構成を基本とするより大規模かつ複雑な「前庭・前室的風除空間による屈折動線型の防風策」が発達した。なお、この時期のバーディアでは遺跡が少ないが、次の前期青銅器時代になると中庭を開む環状連結遺構が出現し、これに固有の防風策が従来の「躰り口」との併用で用いられた。ただしその一方では、片袖・両袖タイプの防風壁を伴う小型円形遺構が依然として併存していた。

以上が、おおよその流れである。誤解の無いように申添えておくが、西アジア新石器文化集落の風対策が、こうした遺構面の工夫のみに限定されていたわけではない。より簡便な方策として、例えば遺跡周囲の地形を利用することもあった。例えば、シナイ半島南部の先土器新石器文化Aの遺跡アブ・マーデイI(Abu Madi I)では、巨岩背後の浅い窪地に遺構が営まれていた(Bar-Yosef 1985: 115)。この巨岩は、おそらく防風の機能を果たしていたであろう。また、ヨルダン渓谷東斜面における先土器新石器文化Aの遺跡イラク・エッ・ドップ(Iraq ed-Dubb)では、洞窟内に遺構を営むことによって、風の問題を巧みに回避していた(Kuijt 1994: Fig. 3)。このほか、アナトリア高原のアシュケル・ホユック(Aşkılı Höyük)やチャタル・ホユック(Çatal Höyük)などに見られる稠密な集落構造も、それ自体が一種の防風策となり得たであろう(Esin and Harmankaya 1999: Fig. 3; Mellaart 1967)。同様に、イエリコやテル・マグザリーヤなどで確認されている集落の周壁にも、防風の機能が併存していたと考えられる(藤井 2000b; Bader 1993: Fig. 2.3)。そもそも、壁面の厚い本格的な住居が建造されるようになると、その壁面の厚さ自体が(壁面奥に取り付けられた戸口にとっては)両袖タイプの防風壁として機能した可能性がある。

従って、遺構面での防風策の欠如が、その集落における防風策全般の欠如を直ちに意味するわけではない。この点、注意が必要であろう。本稿で扱ったのは、遺構基礎部分のプランに防風機能が顕在化した事例だけである。上記のような多様な防風策が併存していたことを、再度お断りしておきたい。

考察

最後に、防風壁・防風策に関わる幾つかの問題について検討してみよう。ここでは、1)卓越風との対応、2)防風壁から見たバーディアの特異性、3)カア・アブ・トレイハ西遺跡第4層防風壁の系譜問題、の3点について考察する。

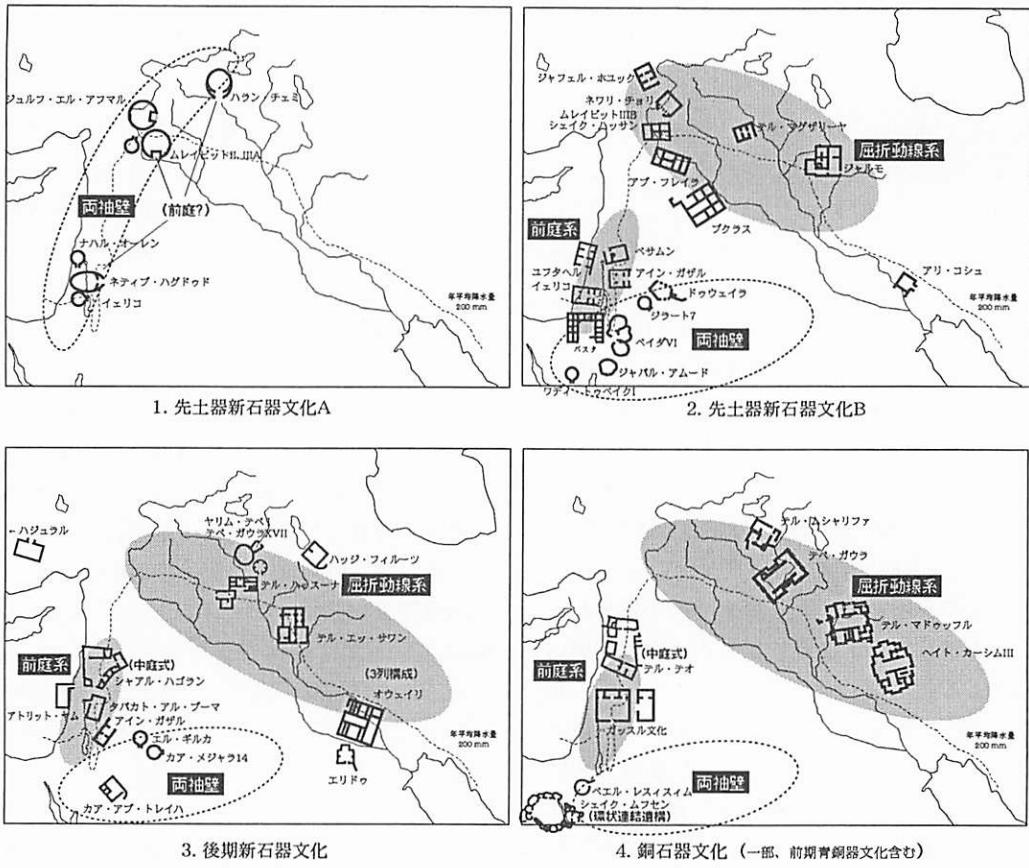


図8 防風壁・防風策の分布と型式（縮尺不同、方位のみ報告書から概略を復元）

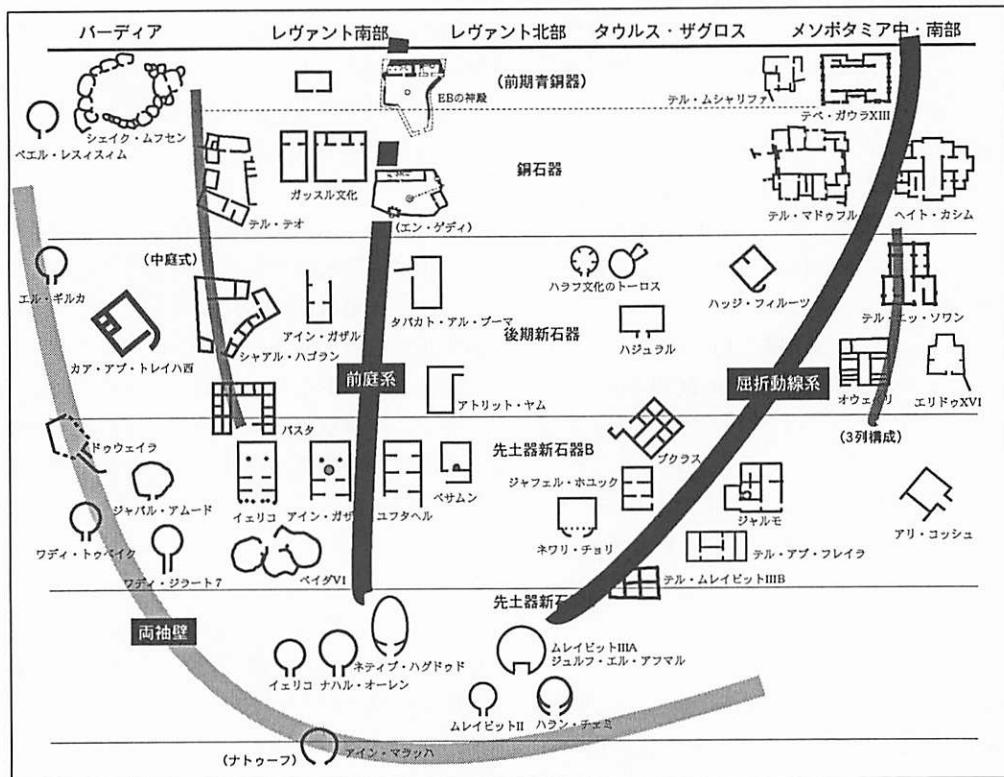


図9 防風壁・防風策の系統図（縮尺・方位不同）

1. 卓越風方位との関係

現在の西アジアでは一般に、西風または北西風が卓越風となっている。そのことは、例えばヨルダン高原周辺の風向図や滑走路の方位⁶⁾などによって知ることができる（図10）。同じことは、イラク各地の観測データからも確認できる（Kubba 1987: Fig. 14）。先史時代の西アジアにおいても、卓越風の方向はこれとほぼ同じであったと仮定してよかろう。では、先述した各種防風壁・防風策の方位は、この卓越風の方位とどのように対応していたのであろうか。先の分布図から、以下のようなことが言えるであろう。

先土器新石器文化Aの防風壁・防風策は、北西または西からの卓越風に対してほぼ正確に対応している。大半の家屋が卓越風を背面で遮断すると同時に、風下の南～東側に出入口を置いて、この部分を防風壁で保護している。集落が小規模かつ低密度で、隣家の壁面に間接的な防風効果をあまり期待できない段階では、それぞれの家屋が個別に防風策を講ずる必要があったのであろう。小型かつ単室で、建材的にも遮蔽性に劣る先土器新石器文化Aの家屋の場合は、なおさらであったと考えられる。

では、集落の稠密度が上がり、家屋自体も大型化かつ複室化した先土器新石器文化Bの場合はどうかというと、意外にも大きな変化は認められない。やはり大半の家屋が出入口を卓越風の風下側に置いて、各種の防風壁・防風策で保護している。従って、卓越風の問題は、集落の稠密度や家屋の構造だけで解消されるようなものではなく、現在

のフセイニーエ村同様に、やはり個々の家屋単位で対処すべききわめて根深い問題であったと考えるべきなのであろう。

ただし、この原則も後期新石器文化以降になるとやや後退し始める。特に、メソポタミアでその傾向が強い。例えばサマッラ文化のテル・エッ・ソワンの場合、半数以上の家屋が出入口を卓越風方位と同じ北西または南西に向いている（図11）。「前庭・前室的風除空間による屈折動線型の防風策」も、これでは効果半減である。ではなぜ、このような配置が許されたのであろうか。集落の稠密度や家屋の大型化だけでは、この現象は説明できない。考えられるのは、周壁が集落全体の防風壁として機能したこと、そしておそらくは（ドアソケットの出土にも表れているように）戸口自体の密閉度が向上したこと、などの理由である。また、街路や広場との関係も重要であったに違いない。公共のスペースに面して出入口を設けようすれば、卓越風方位との関係に時として齟齬が生ずるのはやむを得ないからである。

しかしこの場合は、異常である。「時として」どころか、大半の家屋がそうなのであるから、むしろ積極的な理由を想定すべきであろう。集落の稠密度が増し、家屋や戸口自体の密閉度が向上すると、今度は逆に通風の問題が浮上してきたのではないだろうか。この点、卓越風方位との間に齟齬の認められる事例がメソポタミアに多いことは、きわめて示唆的であろう。というのも、メソポタミアのように

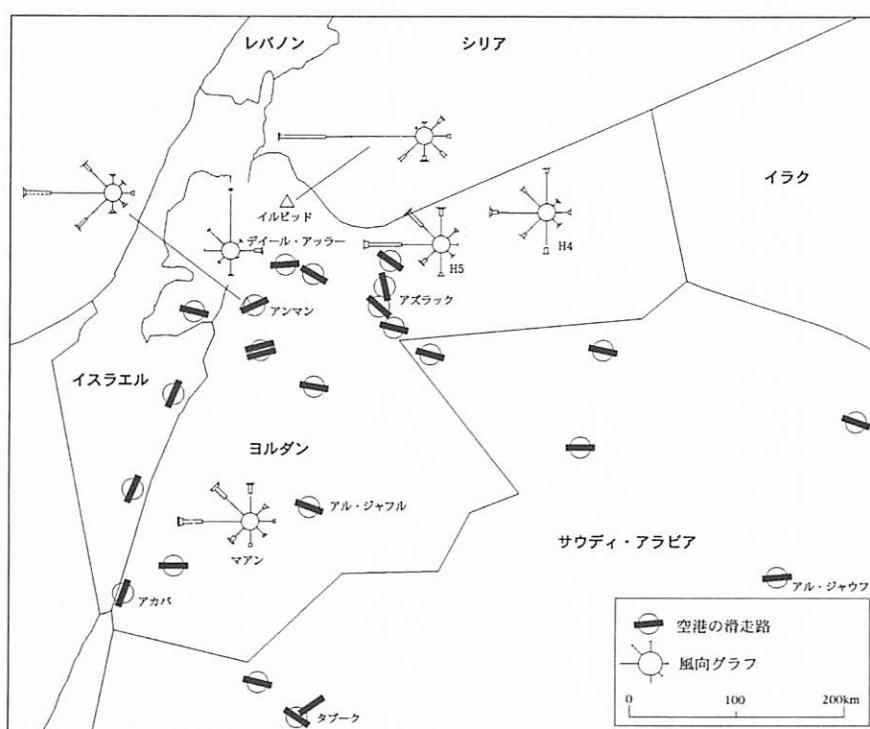


図10 レヴァント南部の卓越風（Minisitry of Defence, UK. 1981, Jordan National Geographic Center 1984 を基に作成）



図11 テル・エッ・ソワンにおける家屋出入口の方位 (Margueron 1989: Fig. 1,5 を Breniquet 1991; Huot 1994; Youkana 1997などを参照して合成)

湿度の比較的高い地域においては、通風の問題がより切実に感じられたに違いないからである。後世の様々な通風設備 (Aurenche 1977: 12-13; Kubba 1987: 155-158; Leick 1988: 144) が示唆しているように、少なくとも後期新石器文化以降のメソポタミアでは、防風と並んで通風の問題が強く意識されていたように思われる。テル・エッ・ソワンの場合も、そのように解釈することができるであろう。出入口をあえて風上側に置くことによって夏の川風を取り入れ、冬の強風は屈折動線型の風除空間によって緩和する。低湿地の定住生活では、こうした両面作戦が必要になったのではないだろうか。その意味で、後期新石器文化以降のメソポタミア集落にしばしば認められる卓越風方位と家屋出入口方位との齟齬は、むしろ積極的な意味合いを持っているのかも知れない。

2. 防風壁から見たバーディアの特異性

防風壁の問題に関して痛感するのは、バーディアの特異性である。その特異性は、先に論じた卓越風方位との関係においても認められる。新石器文化の両袖防風壁は無論のこと、前期青銅器文化の中庭式環状連結遺構においても、バーディアでは常に北西からの卓越風が意識され、方位的にも正確に対応していた。バーディアの場合、卓越風の側に開口する出入口はほぼ皆無と言ってよい。この点、他の地域とは対照的であろう。その背景には、砂嵐がしばしば吹き荒れること、天然の障壁に乏しいこと、集団の規模が小さいので個々の家屋単位で防風策を講ずるほかないこと、小型単室遺構では屋内全体に風の影響が及ぶこと、などの事情があったものと思われる。また、上部構造にしばしば軟質の建材を用いたので、家屋自体がもともと風に弱かったことも原因の一つであろう。

バーディア防風壁の特異性は、その型式にも表れている

(図9)。先述したように、バーディアでは、先土器新石器文化Aの伝統に連なる両袖タイプの防風壁が永く用いられた。これは、二つの点で特異な現象と言えるであろう。第一に、バーディアでは先土器新石器文化Aの遺跡自体が未確認であるにも関わらず、同文化の防風壁の伝統をそのまま継承しているという点で。第二に、他地域の防風壁が先土器新石器文化Aの伝統から徐々に離脱していったにも関わらず、バーディアでのみその伝統が永く保持されたという点で。バーディアの防風壁に見られるこうした型式的な特異性は、それが付帯する遺構本体の特異性、さらにはそれを築造した集団の適応形態自体の特異性とも、密接にリンクしているのである。

3. カア・アブ・トレイハ西遺跡第4層防風壁の系譜

これまでの考察を基に、カア・アブ・トレイハ西遺跡第4層の防風壁およびそれが付帯する擬住居の系譜問題について検討してみよう。筆者がこの問題に注目するのは、この遺跡の第4層（後期新石器文化前半）がトランシヨルダンにおける遊牧的適応の開始時期に相当しているからである（藤井 2001c: 254-257）。従って、第4層防風壁のあり方には同地における遊牧化の経緯が反映している可能性がある。トランシヨルダンにおける遊牧化は、定住農耕牧畜民によるステップへの進出を意味しているのか、それとも周辺遊動民自らの家畜導入結果に過ぎないのか——遊牧の起源問題に一つの有力な手掛かりを与えるという意味で、防風壁・擬住居の系譜問題は重要であろう。

まず言えるのは、この遺跡で確認された「矩形遺構に伴う曲線的な片袖壁」がバーディアの防風壁としてはきわめて異例である、ということである（図9）。バーディアでは小型円形遺構に伴う両袖タイプの防風壁が永く用いられた。前期青銅器時代になってようやく新しい要素（中庭式

環状連結遺構)が加わったが、この時点においてもなお小型円形遺構が営まれ、そこに片袖・両袖タイプの防風壁が付設されていた。カア・アブ・トレイハ西遺跡の防風壁は、こうした流れと対応していない。第一に、防風壁自体が曲線的な片袖壁であるという点で。第二に、防風壁の付帯する遺構本体が矩形プランであるという点で。では、この2つの特徴はどのような系譜に連なるのであろうか。

(1) 曲線的な片袖防風壁の系譜

カア・アブ・トレイハで確認された曲線的な片袖防風壁は、現状では孤立している。遠くイラン高原のハッジ・フィルーツを除いて、類例は見当たらない。強いていえば、シナイ半島北部のAIN・カディスⅠの防風壁がこれに相当するであろうが、先述したようにこの防風壁には同定上の疑問があった。従って、曲線的な片袖防風壁それ自体の系譜を追跡することは、残念ながら、現状では困難である。

ただし、比較の範囲を片袖壁全般にまで広げると、いくらか類例は認められる。ユーフラテス中流域のブクラス(先土器新石器文化B末)、メソポタミア低地のエリドゥ(後期新石器文化)、ヨルダン渓谷東斜面のタバカト・アル・ブーマ(同)などの事例が、そうである。これらはいずれもカア・アブ・トレイハ西遺跡第4層とほぼ同時代の集落である。しかも、定住農耕文化圏の中ではややバーディア寄りの立地にある。その中間的性格が、定住農耕文化圏側の要素(屈折動線型の防風策および矩形プランの遺構)とバーディア的な要素(袖壁タイプの防風壁)との併存となって表れているのであろう。カア・アブ・トレイハ西遺跡第4層の防風壁も、これと同様に解釈することができる。矩形プランの遺構と片袖タイプの防風壁とのセット関係という点で、問題の防風壁は定住農耕文化圏縁辺部集落の防風壁の系譜に連なるものと言えるであろう。

ただし、そこに見られる建築技法(2列立石マウンド構造)は、明らかにバーディアの伝統である⁷⁾。この種の建築技法は、バーディア以外では認められない。従って、カア・アブ・トレイハ西遺跡第4層の防風壁には、二つの側面が併存することになるであろう。型式的には定住農耕文化圏縁辺部の防風壁という側面が、一方、建築技法面ではバーディア側の伝統という側面が、それぞれ認められるのである。

(2) 矩形遺構の系譜

矩形プランは、一般に、定住農耕文化圏側の伝統と見なされている。しかし、バーディアの側にも矩形遺構は散見される。例えば、アズラックやワディ・ジラート遺跡群の遺構がそのである(図12)。これらの遺構は、2列立石の壁面を持つという点でも、また、(ジラート26号遺跡A発掘区のように)屋内最奥部に小型ニッチを伴うという点でも、カア・アブ・トレイハの擬住居ときわめて類似して

いる。その点で、カア・アブ・トレイハの矩形擬住居は、バーディアの矩形遺構群の一環と言えるのかも知れない。ただし、問題が一つある。アズラック、ワディ・ジラートなどの矩形遺構は、集落内においても孤立した存在にすぎない。例えばジラート26号遺跡の場合、この集落の主体となっているのは、円形または楕円形の単室遺構である。これに対して、A発掘区出土の矩形遺構は、集落内でも特異な存在に過ぎない。このような孤立した遺構との類似性を基に結論を導くのは、やや危険であろう。

そこで、バーディアにおける矩形遺構の意味自体を確かめておく必要がある。これについては二つの解釈が成り立つであろう。一つは集落内での特殊建造物(例えば行政・祭祀用の特殊建造物)という解釈である。しかしこの解釈は、この場合に限っては成立しないように思われる。といふのも、バーディアの矩形遺構は、建材・技法・規模などの点で、一般の円形遺構と大差ないからである。集落内の位置についても、疑問がある。行政・祭祀的なセンターとしての建造物であるとすれば、集落内の中央付近または特定の戦略的位置にあるのが普通であろう。ジラート26号遺跡の場合、問題の矩形遺構は集落の西端に位置しており、こうした機能は想像しがたい。

もう一つの解釈が、外部要素という解釈である。この点で示唆的のが、ベイダにおける遺構の層位的変遷である。ベイダの場合、VI層では小型・円形・単室の蜂の巣状遺構、V-IV層では楕円形~隅丸矩形の単室遺構、III-II層では矩形多区画のピア・ハウス、という流れが見て取れる(図12右下)。バーディアに散見される矩形遺構は、こうした定住農耕文化圏側の遺構の変遷と対応しているのではないだろうか。例えばジラート7(先土器新石器文化B前期)の隅丸矩形単室遺構は、ベイダのV-IV層の同類の遺構に、またジラート26(同中期)の矩形小区画遺構は、同III-II層のピア・ハウスに、それぞれ対応しているように思われるるのである。

以上のことから、バーディアの矩形遺構には、「バーディアの集落内では確かに孤立した存在はあるが、逆に定住農耕文化圏側の遺構とは密接に対応する」という、特異な性格を認めることができる。この性格は、定住農耕文化圏側の建築要素がバーディアに部分的に波及していたことを意味しているのであろう。定住農耕文化圏の農作物とバーディアの物産(特に追い込み獣の獲物であるガゼルの肉)は互いに交易されていたと考えられるが(Banning 1998: 212; 藤井 1999: 108)、この場合、前者の側にとっての出先拠点(いわば商館・ゲストハウス的な建造物)となったのが、こうした矩形遺構なのではないだろうか⁸⁾。

カア・アブ・トレイハ西遺跡第4層の矩形擬住居群は、こうした遺構の擬似的な連結体である。従って、それはや

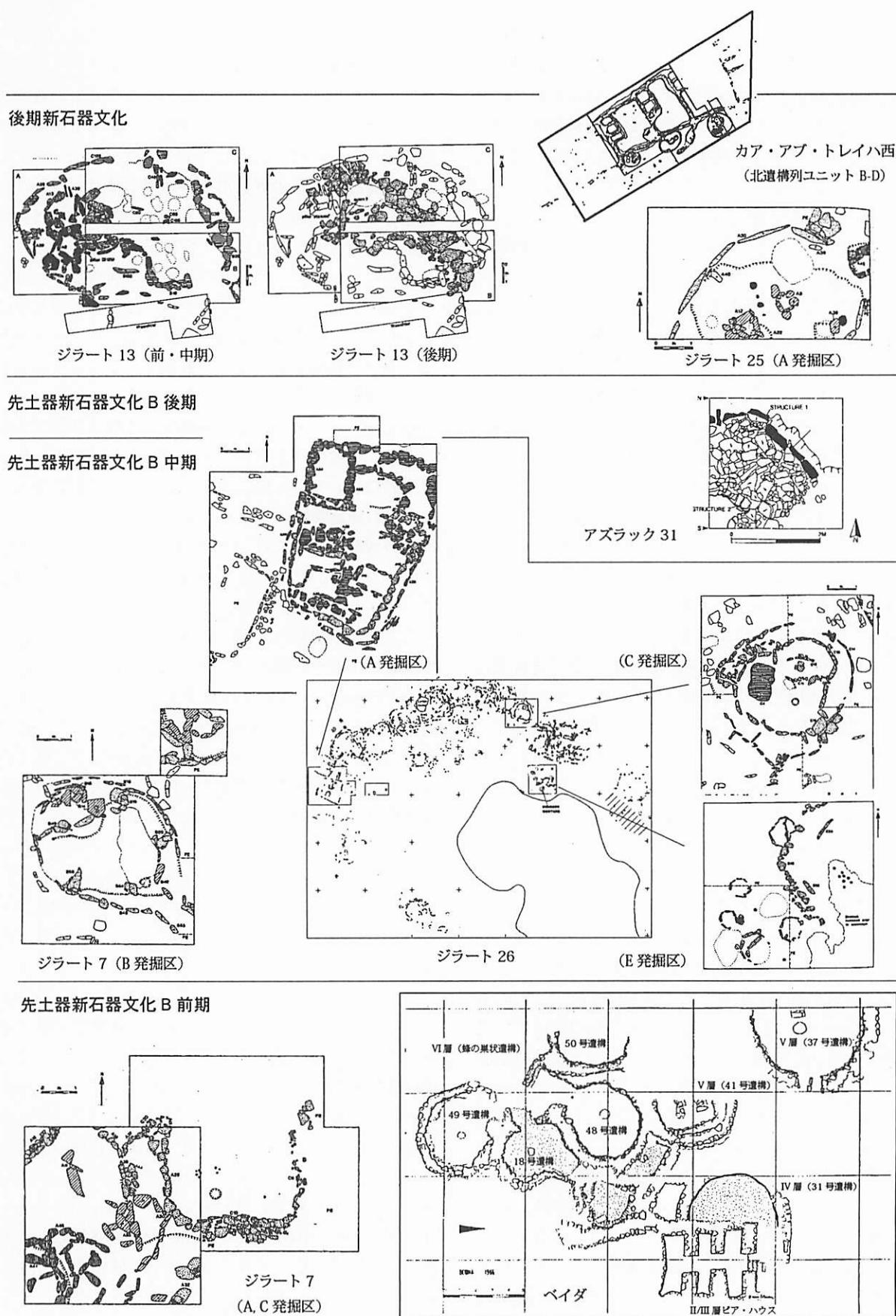


図12 バーディアの遺構とベイダの遺構 (Garrard et al. 1994; Kirkbride 1967; Fujii 2001 を基に構成)

はり定住農耕文化圏側の系譜に連なるものと考えられるのである。

(3) トランシスヨルダン南北の遊牧化

カア・アブ・トレイハ西遺跡第4層の防風壁およびそれが付帯する擬住居に関する検討結果が、ほぼ一致したことになる。曲線的な片袖防風壁、より正確には矩形遺構と組み合わされた片袖防風壁は、定住農耕文化圏縁辺部の系譜に連なるものと考えられる。一方、バーディアに散見される矩形プランの住居には、定住農耕文化圏からの進出拠点としての意味合いが看取できた。この二つの見通しから、カア・アブ・トレイハ西遺跡を含むトランシスヨルダン南部の遊牧化は定住農耕文化圏縁辺部からの進出という形で進行したと考えることができるであろう（藤井 1999b）。無論、カア・アブ・トレイハ西遺跡の場合は、住居ではなくあくまでも擬住居であるから、上記のことが直ちに当てはまるとは限らない。しかし、葬制に関わるより保守的な要素として、擬住居の形態にはその集団の派生経緯がより正確に反映していると考えられるのである。

これと対照的なのが、トランシスヨルダン北部の様相である。アズラック・ワディ・ジラート遺跡群でも、この時期（後期新石器文化）に家畜ヒツジが導入され、遊牧化が始まったと考えられているが（藤井 1999: 114-118, 2001: 262-264）、そこでは、先土器新石器文化Bの段階で希に見られた矩形遺構が姿を消し、（カア・アブ・トレイハ西遺跡の擬集落とは全く対照的に）円形遺構だけで構成された旧来の集落への逆戻りが認められる。しかも、カア・アブ・トレイハ西遺跡のような擬集落は報告されていない。従って、定住農耕文化圏縁辺部からの直接的な波及が想定される南部とは対照的に、トランシスヨルダン北部では、定住農耕文化圏の要素を逆に排除する形で、より自律的な遊牧化が進行したと考えられるのである。

その背景には、この地域における先行文化の存在があったと考えられる。北部では先土器新石器文化Bの前期から適応が進んでいた。対照的に、南部では、先土器新石器文化Bの遺跡がまだ確認されておらず、後期新石器文化になって初めて本格的なバーディアへの進出が始まったと考えられている。こうした先行文化の有無が、南北それぞれの遊牧化経緯にも反映しているのであろう。もう一つ重要なのが、定住農耕文化圏との距離の大小である。ジャフル盆地とアズラック盆地では、定住農耕文化圏からの距離に格段の差があり、このことも遊牧化の経緯に大きな影響を与えたと考えられる。

(4) まとめ

防風壁（およびそれが付帯する矩形遺構）の系譜から見て、カア・アブ・トレイハ西遺跡を含むジャフル盆地の遊牧化は定住農耕文化圏縁辺部からの直接的な波及という形

で進行したと考えられる。これが本章の結論である。この結論をより確かなものにするための手がかりとなる遺跡も、すでに確認されている（Fujii 2002b）。ジャフル盆地では、その西端に位置する先土器新石器文化Bの小型定住集落（JF0116: ジャバル・ジュハイラ Jabal Juhayra）を起点に、その直ぐ東側に位置する後期新石器文化初頭の擬集落（JF0202: ハラル・ジュハイラ Harra al-Juhayra）を介して、さらにステップ内奥に位置する後期新石器文化中頃の擬集落カア・アブ・トレイハ西へ、という初期遊牧文化の展開があったと想定されるのである。

最後に、上記の結論を裏付けるもう一つの有力な視点を紹介しておこう。それは、住居のファサード直下に（おそらくは家長の）遺体を埋葬し、このことをもって当該の住居を廃屋とするという「壁際廃屋葬」の系譜である。カア・アブ・トレイハ西遺跡における擬集落の形成は、こうした特異な葬制の発露に他ならない。この壁際廃屋葬は、クファル・ハホレシュ（Kfar HaHoresh (Goring-Morris 2000; Kuijt and Goring-Morris 2002: 394-396)）、アイン・ガザル（Banning 1998: 222; Banning and Byrd 1987, 1989: 530-531）、イエリコ（Kenyon 1981: 77; 穂 1994: 381, 1995: 128-129）、タバカト・アブ・ブーマ（Banning 1998: 225; Banning et al. 1992: 52; Blackham 1997）などの葬制・家屋更新システムに連なっているように思われる。だとすれば、この点でも、トランシスヨルダン南部の遊牧化が定住農耕文化圏からの派生であったことを裏付けることができるであろう。

おわりに

西アジア新石器文化集落の住居には、しばしば防風壁が伴うことが分かった。単独の防風壁を置かない場合でも、例えば出入口付近の動線を屈折させたり、前庭の壁面で代用したり、あるいは出入口自体を小さな「躊り口」にするなどの、様々な防風策が採られていたことも分かった。西アジア新石器文化の住民にとって、風（およびそれが巻き起こす砂塵）の問題は、それほどまでに切実であったのであろう。その切実さは、擬集落の擬住居にまでわざわざ防風壁を付設していることに如実に表れている。その意味で、防風壁・防風策の問題は、西アジアにおける新石器化・遊牧化の経緯を読み解く際の重要な鍵になり得る。カア・アブ・トレイハ西遺跡第4層の防風壁に関する考察は、その一例に過ぎない。

しかし、防風問題の対偶には常に通風の問題があった。また、防風問題だけに限ってみても、例えば集落の周辺地形、周壁・城壁の有無、集落内の住居配置、街路や広場との関係、戸口自体の構造と性質などの、併せて考慮すべき要素があった。さらに言うならば、防風問題に関連して、

例えば日射や視線などの遮断、あるいは家屋の構造強化や各種作業場の形成などといった、別の問題も認められた。今回の考察では、遺構プラン上に顕在化した防風壁・防風策だけを独立して扱ったに過ぎない。通風その他の問題については、また別の機会に検討したい。

一部文献の複写に関して、後藤健・紺谷亮一・足立拓朗・安倍雅史の4氏にお世話になりました。また、岡田保良・小泉龍人の両氏からはメソポタミアの遺構についてのご教示をいただき、匿名の査読者2氏にはオリジナル原稿に関しての貴重なご助言を賜りました。西アジア考古学会平成13年度第6回定例研究会（2002年5月11日、筑波大学学校教育部）における筆者の発表に対して寄せられた質疑からも、多くの示唆を得ることができました。記して、お礼申し上げます。最後に、本稿の発想の基となったカア・アブ・トレイハ西遺跡での調査に協力してくれた多くの方々にも、厚くお礼申し上げます。（本稿は、文部科学省科学研究費基盤研究(B)(1)「西アジア初期遊牧民の葬制に伴う「擬住居」「擬壁」の研究」（課題番号：13571037）、および三菱財団による学術研究助成「擬集落仮説－西アジア初期遊牧民の葬制研究」の成果の一部である。）

註

- 1) 「風除空間」という用語は、北陸地方の家屋に伝統的な「風除室（風雪の侵入を緩和するための玄関先の小部屋）」を基に考案した。
- 2) 「袖壁」という用語は、岡田 1995: 43 から引用した。
- 3) ただし、この遺跡の第4層矩形遺構群はケルン墓付帯の「擬住居」に過ぎないので、上部構造が実際に架構されていたかどうかは、不明である。
- 4) この時代の名称は「土器新石器文化」とするのが最も一般的である。しかし、レヴァント南部の先土器新石器文化Cやバーディアの同時期の文化では土器が伴わないので、ここではあえて「後期新石器文化」の語を用いた。
- 5) この復元は、発掘報告者によるものである (Llyod and Safar 1945)。しかしその一方では、防風壁以外の要素（階段の袖壁など）に見立てた復元案も提示されている (Kubba 1987: 91-92, Fig. 78-79; Margueron 1983: Fig. 7)。
- 6) 航空機にとって、離発着時の横風は大敵である。そのため、滑走路はその地域の卓越風と同方向を向いて造られることが多い。逆に言うと、滑走路の方位を見れば、その地域の卓越風の方位がおよそ推測できる。本図に滑走路を表示したのは、そのためである。
- 7) 2列立石マウンド構造の遺構は、シナイ半島のワディ・トゥベイク、ネゲブ地方のビカト・ウヴダ6 (Biqat 'Uvda 6) (Goring-Morris 1993; Yoge 1983)、S-19遺跡 (Eddy et al. 1999: Fig. 3-37)、S-21遺跡 (op. cit: Fig. 3-44) アズラックのワディ・ジラート遺跡群 (Garrard et al. 1994)、サウジアラビア北部の207-46号遺跡 (Zarins 1989: Fig. 14.10b) など、いずれもステップ・沙漠地帯の遺跡に集中している。この種の遺構は、地中海性気候帶の遺跡ではまだ確認されていない。
- 8) アズラック、ワディ・ジラートの遺跡群がその成立当初から栽培コムギ・オオムギを伴っているという事実も、この枠組みの中で理解できるかも知れない（藤井 1999: 108, 2001: 262）。

参考文献

Akkermans, P. A., J. A. K. Boerma, A. T. Clason, S. G. Hill, E. Lohof, C.

Meiklejohn, M. Le Mièvre, G. M. F. Molgat, J. J. Roodenberg, W. Waterbolck-van Rooyen and W. van Zeist 1983 Bouqras Revisited: Preliminary Report on a Project in Eastern Syria. *Proceedings of the Prehistoric Society* 49: 335-372.

Akkermans, P. A., H. Fokkens and H. T. Waterbolck 1981 Stratigraphy, Architecture and Lay-Out of Bouqras. In *Préhistoire du Levant*, 485-501. Paris, Editions du CNRS.

Amiran, R. 1978 *Early Arad, vol. I: First-Fifth Seasons of Excavations, 1962-1966*. Jerusalem: The Israel Exploration Society.

Angelotti, M. 1996 Il villaggio PPNB di Gibal Amud (Bacino di Isma, Giordania meridionale). *Periodico del Labo. Di Ecologia del Quaternario* 18: 49-62.

Aurenche, O. 1977 *Dictionnaire Illustré Multilingue de l'Architecture du Proche Orient Ancient*. Lyon, Maison de l'Orient.

Aurenche, O. 1981a *La Maison Orientale*. Paris, Librairie Orientaliste Paul Geuthner S. A.

Aurenche, O. 1981b L'Architecture Mésopotamienne du 7e au 4e Millénaires. *Paléorient* 7/2: 43-55.

Bader, N. O. 1989 *Drevenejshie Zemledel'tsy Severnoj Mesopotamii* (Earliest Farmers of Northern Mesopotamia). Moscow, Nauka.

Banning, E. B. 1996 Houses, Compounds and Mansions in the Prehistoric Near East. In G. Coupland and E. B. Banning (eds.), *People Who Lived in Big Houses: Archaeological Perspectives on Large Domestic Structures*, 165-185. Madison, Prehistory Press.

Banning, E. B. 1998 The Neolithic Period: Triumphs of Architecture, Agriculture, and Art. *Near Eastern Archaeology* 61/4: 188-237.

Banning, E. B. and B. F. Bryd 1987 Houses and the Changing Residential Unit: Domestic Architecture at PPNB 'Ain Ghazal, Jordan. *Proceedings of the Prehistoric Society* 53: 309-325.

Banning, E. B. and B. F. Bryd 1989 Renovations and the Changing Residential Unit at 'Ain Ghazal, Jordan. In S. MacEachern, D. J. W. Archer and R. D. Garvin (eds.), *Households and Communities*, 525-533. Calgary, The Archaeological Association of the University of Calgary.

Banning, E. B., R. R. Dods, J. Field, I. Kuijt, J. McCorrison, J. Siggers, H. Taani, and J. Triggs 1992 Tabaqat al-Buma: 1990 Excavations at a Kebaran and Late Neolithic Site in Wadi Ziqlab. *ADAJ* 32: 43-69.

Bar-Yoef, O. 1982 Pre-Pottery Neolithic Sites in Southern Sinai. *Biblical Archaeologist* 45/1: 9-12.

Bar-Yosef, O. 1985 The Stone Age of the Sinai Peninsula. In M. Liverani et al. (eds.), *Studi di Paletnologia in Onore di Salvatore Puglisi*, 107-122. Rome.

Bar-Yosef, O. and A. Gopher (eds.) 1997 *An Early Neolithic Village in the Jordan Valley, part 1: The Archaeology of Netiv Hagdud*. Cambridge, Peabody Museum, Harvard University.

Beit-Arieh, I. 1978 A Canaanite Site near Sheikh Mukhsein. *Expedition* 20/4: 8-11.

Beit-Arieh, I. 1981 An Early Bronze Age II Site near Sheikh 'Awad in Southern Sinai. *Tel Aviv* 8: 5-127.

Beit-Arieh, I. 1992 Buildings and Settlement Patterns at Early Bronze Age II Sites in Southern Israel and Southern Sinai. In Kempinski and Reich, 81-84.

Ben-Tor, A. 1992 Early Bronze Age Dwellings and Installations. In Kempinski and Reich, 60-67.

Betts, A. 1982 Prehistoric Sites at Qa'a Mejalla, Eastern Jordan. *Levant* 14: 1-34.

Betts, A. 1992 Tell el-Hibr: A Rock Shelter Occupation of the Fourth

- Millenium B.C.E. in the Jordanian Badia. *BASOR* 287: 5-23.
- Betts, A. 1998 *The Harra and the Hamad: Excavations and Surveys in Eastern Jordan, vol. 1*. Sheffield, Sheffield Academic Press.
- Betts, A. and S. Helms 1987 A Preliminary Survey of Late Neolithic Settlements at el-Ghirqa, Eastern Jordan. *Proceedings of Prehistoric Society* 53: 327-336.
- Blackham, M. 1997 Changing Settlement at Tabaqat al-Buma in Wadi Ziqlab, Jordan: a Stratigraphic analysis. In Gebel Kafaf and Rollefson, 345-360.
- Braidwood, L. S., R. J. Braidwood, B. Howe, C. A. Reed and P. J. Watson 1983 *Prehistoric Archaeology along the Zagros Flanks*. Chicago, The Oriental Institute of the University of Chicago.
- Braun, E. 1997 *Yiftah'el: Salvage and Rescue Excavations at a Prehistoric Village in Lower Galilee, Israel*. Jerusalem, Israel Antiquities Authority.
- Breniquet, C. 1991 Tell es-Sawwan: Realites ete Problemes. *Iraq* 53: 75-90.
- Byrd, B. F. and E. B. Banning 1988 Southern Levantine Pier Houses: Intersite Architectural Patterning during the Pre-Pottery Neolithic B. *Paléorient* 14/1: 65-72.
- Cauvin, J. 1977 Les Fouilles de Mureybet (1971-1974): Et leur Signification pour les Origines de la Sédentarization au Proche-Orient. *Annals of the American School of Oriental Research* 44: 19-48.
- Cauvin, J. 1994 *Naissance des Divinités, Naissance de l'Agriculture*. Paris, CNRS Éditions.
- Cohen, R. 1992 Architecture in the Intermediate Early Bronze/Middle Bronze Period. In Kempinski and Reich, 85-90.
- Cohen, R. 1999 *Ancient Settlement of the Central Negev, vol. I: The Chalcolithic Period, The Early Bronze Age and the Middle Bronze Age I*. IAA Reports, No. 6. Jerusalem, The Israel Antiquities Authority.
- Cohen, R. and W. G. Dever 1980 Preliminary Report of the Second Season of the "Central Negev Highlands Project". *BASOR* 236: 41-60.
- Dunand, M. 1973 *Fouilles de Byblos, tome V: L'Architecture. les Tomes, le Matériel Domestique, des Origines Néolithiques à l'Avenement Urbain*. Paris, Librairie d'Amérique et d'Orient, Adrien Maisonneuve.
- Eddy, F. W., F. Wendorf and Associates 1999 *An Archaeological Investigation of the Central Sinai, Egypt*. Boulder, University Press of Colorado.
- Egami, N. 1959 *Telul eth Thalathat: The Excavations of Tell II, 1956-1957, vol. I*. Tokyo, Yamakawa Publishing.
- Eisenberg, E., A. Gopher and R. Greenberg 2001 *Tel Te'o: A Neolithic, Chalcolithic, and Early Bronze Age Site in the Hula Valley*. IAA Report, No. 13. Jerusalem, Israel Antiquities Authority.
- Esin, U. and S. Harmankaya 1999 Asikli. In Ozdogan and Basgelen, 115-132.
- Flannery, K. V. 1972 The Origins of the Village as a Settlement Type in Mesoamerica and the Near East: A Comparative Study. In P. J. Ucko, R. Tringham and G. W. Dimbleby (eds.), *Man, Settlement and Urbanism*, 23-53.
- Forest, J-D. 1983a Aux Origines de l'Architecture Obeidienne: Les Plans de Type Sammra. *Akkadica* 34: 1-47.
- Forest, J-D. 1983b *Les Pratiques Funéraires en Mésopotamie du 5e Millénaire au Début du 3e, Étude de Cas*. Paris, Editions Recherche sur le Civilisations.
- Forest, J-D. 1996 *Mésopotamie: L'Apparition de l'Etat VIIe-IIIe Millénaires*. Paris, Méditerranée.
- Forest, J-D. 1996 Stratigraphie et Architecture de Oueili Obeid 0 et 1: Travaux de 1987 et 1989. In J. L. Huot (ed.), *Oueili: Travaux de 1987 to 1989*, 19-102. Paris, Éditions Recherche sur les Civilizations.
- Forest-Foucault, C. 1980 Rapport sur les Fouilles de Kheit Qasim III-Hamrin. *Paléorient* 6: 221-224.
- Fujii, S. 1998 Qa' Abu Tulayha West: An Interim Report of the 1997 Season. *ADAJ* 42: 123-140.
- Fujii, S. 1999a Qa' Abu Tulayha West: An Interim Report of the 1998 Season. *ADAJ* 43: 69-89.
- Fujii, S. 1999b Qa' Abu Tulayha West (Newsletter). *AJA* 103/3: 496-498.
- Fujii, S. 2000a Qa' Abu Tulayha West: An Interim Report of the 1999 Season. *ADAJ* 44: 149-171.
- Fujii, S. 2000b Qa' Abu Tulayha West (Newsletter). *AJA* 104/3 (forthcoming).
- Fujii, S. 2000c Pseudo-Settlement Hypothesis: Evidence from Qa' Abu Tulayha West. *Preprint for the 5th International Conference of ASWA*.
- Fujii, S. 2001 Qa' Abu Tulayha West, 2000: An Interim Report of the Fourth Season. *ADAJ* 45: 19-37.
- Fujii, S. 2002a Qa' Abu Tulayha West, 2001: An Interim Report of the Fifth Season. *ADAJ* 46: 15-39.
- Fujii, S. 2002b A Brief Note on the 2001-2002 Winter Season Survey of the al-Jafr Basin in Southern Jordan. *ADAJ* 46: 41-49.
- Fujii, S. 2002c Pseudo-Settlement Hypothesis: Evidence from Qa' Abu Tulayha West, Southern Jordan. *Zooarchaeology of the Near East VI*: 181-194.
- Fujii, S. 2003 Qa' Abu Tulayha West, 2002: An Interim Report of the Sixth and Final Season. *ADAJ* 47 (forthcoming).
- Galili, E. 1987 A Late Pre-Pottery Neolithic B Site on the Sea Floor at Atlit. *Mitekufat Haeven* 20: 50-71.
- Garfinkel, Y. and M. A. Miller 2002 *Sha'ar Hagolan 1: Neolithic Art in Context*. Oxford, Oxbow Books.
- Garrard, A., D. Baird, S. Colledge, L. Martin and K. Wright 1994 Prehistoric Environment and Settlement in the Azraq Basin: An Interim Report on the 1987 and 1988 Excavation Seasons. *Levant* 26: 73-109.
- Gebel, H. G. K., Z. Kadafi and G. O. Rollefson (eds.) 1997 *The Prehistory of Jordan II: Perspectives from 1997*. Berlin, Ex Oriente.
- Garrod, D. A. E. and D. M. A. Bate 1937 *The Stone Age of Mount Carmel*, vol. 1. Oxford, Clarendon.
- Gopher, A., A. N. Goring-Morris and S. A. Rosen 1995 'Ein Qadis I: A Pre-Pottery Neolithic B Occupation in Eastern Sinai. *Atiqot* 27: 15-33.
- Goring-Morris, N. 1993 From Foraging to Herding in the Negev and Sinai: The Early to Late Neolithic Transition. *Paléorient* 19/1: 65-89.
- Goring-Morris, N. 2000 The Quick and the Dead: The Social Context of Aceramic Neolithic Mortuary Practice as Seen from Kfar HaHoresh. In I. Kuijt, (ed.), *Life in Neolithic Farming Communities: Social Organization, Identity, and Differentiation*, 99-136. New York, Kluwer Academic and Plenum Publishers.
- Hauptman, H. 1999 The Urfa Region. In Özdogan and Basgelen, 65-86 (text) and 39-55(plates).
- Henriksen, E. F. and I. Thuesen (eds.) 1989 *Upon This Foundation: The Ubaid Reconsidered*. Copenhagen, University of Copenhagen.
- Henry, D. 1995 *Prehistoric Cultural Ecology and Evolution*. New York, Plenum Press.
- Hole, F., K. V. Flannery and J. A. Neely 1969 *Prehistory and Human Ecology of the Deh Luran Plain*. Ann Arbor, University of Michigan.
- Huot, J.-L. 1994 *Les Premiers Villageois de Mesopotamie*. Paris, Armand Colin.
- Jasim, S. A. 1985 *The Ubaid Period in Iraq*. BAR International Series 267. Oxford, BAR.

- Jordan National Geographic Center 1984 *National Atlas of Jordan, part 1: Climate and Agroclimatology*. Amman, Jordan National Geographic Center.
- Kempinski, A. 1992 Chalcolithic and Early Bronze Age Temples. In Kempinski and Reich, 53-59.
- Kempinski, A and R. Reich (eds.) 1992 *The Architecture of Ancient Israel: From the Prehistoric to the Persian Periods*. Jerusalem, Israel Exploration Society.
- Kenyon, K. M. and Holland 1981 *Excavations at Jericho, vol.3: The Architecture and Stratigraphy of the Tell*. London, The British School of Archaeology in Jerusalem.
- Kirkbride, D. 1966 Five Seasons at the Pre-Pottery Neolithic Village of Beidha in Jordan: A Summary. *PEQ* 1966: 8-61.
- Kirkbride, D. 1967 Beidha 1965: An Interim Report. *PEQ* 1967: 5-13.
- Kirkbride, D. 1975 Umm Dabagiyah 1974: A Fourth Preliminary Report. *Iraq* 37/1: 3-10.
- Kochavi, M. 1989 The Land of Geshur Project: Regional Archaeology of the Southern Golan (1987-1988 Seasons). *IEJ* 39/1-2: 1-17.
- Kubba, S. A. A. 1987 *Mesopotamian Architecture and Town Planning*. BAR International Series 367. Oxford, BAR.
- Kuijt, I. 1994 Pre-Pottery Neolithic A Settlement Variability: Evidence for Sociopolitical Developments in the Southern Levant. *Journal of Mediterranean Archaeology* 7/2: 165-192.
- Kuijt, I. and N. Goring-Morris 2002 Foraging, Farming, and Social Complexity in the Pre-Pottery Neolithic of the Southern Levant: A Review and Synthesis. *Journal of World Prehistory* 16/4: 361-440.
- Kuijt, I. and M. S. Chesson 1994 Investigations at Jabal Quiesa, Jordan (1993): A Reconstruction of Chronology and Occupational History. *ADAJ* 38: 33-39.
- Lechevallier, M. 1978 *Abou Gosh et Beisanoun*. Paris, Association Paléorient.
- Leick, G. 1988 *A Dictionary of Ancient Near Eastern Architecture*. New York, Routledge.
- Lloyd, S. and F. Safar 1945 Tell Hassuna. *Journal of Near Eastern Studies* 4: 255-289.
- Loon, M. van 1968 The Oriental Institute Excavations at Mureybit, Syria: Preliminary Report on the 1965 Campaign. *Journal of Near Eastern Studies* 27/4: 265-282.
- Mallowan, M. and J. Rose 1935 Excavations at Tall Arpachiyah, 1933. *Iraq* 2: 1-178.
- Margueron, J.-CL. 1983 Notes d'Archéologie et d'Architecture Orientales. *Syria* 60: 1-24.
- Margueron, J.-CL. 1987 Quelques Remarques Concernant l'Architecture Monumentale à l'Époque d'Obeïd. In *Préhistoire de la Mésopotamie*, 349-377. Paris, Éditions du CNRS.
- Margueron, J.-CL. 1989 Architecture et Société à l'époque d'Obeïd. In Henrickson and Thuesen, 43-76.
- Mazar, A. 1992 Temples of the Middle and Late Bronze Ages and the Iron Age. In Kempinski and Reich, 161-187.
- Mellaart, J. 1967 *Catal Hüyük: A Neolithic Town in Anatolia*. London, Thames and Hudson.
- Mellaart, J. 1970 *Excavations at Hacilar*. Edinburgh, Edinburgh University Press.
- Merpert, N., R. M. Munchaev and N. Bader 1976 The Investigations of Soviet Expedition in Iraq, 1973. *Sumer* 32/1&2: 25-61.
- Ministry of Defence, UK. 1981 Tactical Pilotage Chart: TPC-H5.
- Molost, M. and J. Cauvin 1991 Les niveaux inférieurs de Cafer Höyük (Malatya, Turquie): Stratigraphie et architecture (Fouilles 1984-1986). *Cahiers de l'Euphrate* 5-6: 85-114.
- Moore, A. M. T. 1981 North Syria in Neolithic 2. In *Préhistoire du Levant*, 445-456. Paris Editions du CNRS.
- Nadel, D. 1994 Levantine Upper Palaeolithic - Early Epipalaeolithic Burial Customs: Ohalo II as a Case Study. *Paléorient* 20/1: 113-121.
- Nissen, H. J., M. Muheisen and H. G. Gebel 1991 Report on the Excavations at Basta 1988. *ADAJ* 35: 13-40.
- Özdogan, M. and N. Basgelen (eds.) 1999 *Neolithic in Turkey: The Cradle of Civilization*. Istanbul, Arkeoloji ve Sanat Yayınları.
- Perrot, J. 1966 Excavations at 'Eynan ('Ein Mallaha): Preliminary Report on the 1959 Season. *IEJ* 10: 14-22.
- Porath, Y. 1985 A Chalcolithic Building at Fasa'el. *Atiqot* 17: 1-19.
- Porath, Y. 1992 Domestic Architecture of the Chalcolithic Period. In Kempinski and Reich, 40-48.
- Roaf, M. 1982 The Hamrin Sites. In J. Curtis, (ed.), *Fifty Years of Mesopotamian Discovery*, 40-47. London, The British School of Archaeology in Iraq.
- Roaf, M. 1989 Social Organization and Social Activities at Tell Madhur. In Henrickson and Thuesen, 91-145.
- Rollefson, G. 1997 Changes in Architecture and Social Organization at 'Ain Ghazal. In Gebel, Kafafi and Rollefson, 287-307.
- Rosenbeg, M., R. M. Nesbitt, R. W. Redding and T. F. Strasser 1995 Hallan Cemi Tepesi: Some Preliminary Observations concerning Early Neolithic Subsistence Behaviors in Eastern Anatolia. *Anatolica* 21: 1-12.
- Safar, F., M. A. Mustafa and S. Lloyd 1981 *Eridu*. Baghdad, Ministry of Culture and Information.
- Seeden, H. 1982 Ethnoarchaeological Reconstruction of Halafian Occupational Units at Sham ed-Din Tannira. *Berytus* 30: 55-95.
- Simmons, A. H. 2001 Core and Periphery Models during the Neolithic: Is the Analogy Appropriate? *Studies in the History and Archaeology of Jordan* 7: 143-155.
- Speiser, E. A. 1935 *Excavations at Tepe Gawra, I*. Philadelphia, University of Pennsylvania Press.
- Stekelis, M. and T. Yizraely 1963 Excavations at Nahal Oren: Preliminary Report. *IEJ* 13/1: 1-12.
- Strodeur, D., M. Brenet, G. der Apehamian and J.-C. Roux 2001 Les Batiments Communautaires de Jerf el Ahmar et Mureybet Horizon PPNA (Syrie). *Paléorient* 26/1: 29-44.
- Thesiger, W. 1964 *The Marsh Arabs*. New York, E. P. Dutton & Co., Inc.
- Thesiger, W. 1991 *The Thesiger Collection*. Dubai, Motivate Publishing.
- Tobler, A. J. 1950 *Excavations at Tepe Gawra, II*. Philadelphia, University of Pennsylvania Press.
- Valla, F. R., O. Bar-Yosef, P. Smith, E. Tchernov and J. Desse 1986 Un Nouveau Sondage sur la Terrasse d'el Ouad, Israel. *Paléorient* 12/1: 21-38.
- Voigt, M. M. 1983 *Hajji Firuz Tepe, Iran: The Neolithic Settlement*. Pennsylvania, The University Museum, University of Pennsylvania.
- Watkins, T. 1987 Kharabeh Shattani: An Halaf Culture Exposure in Northern Iraq. In: *Préhistoire de la Mésopotamie*, 221-241. Paris, Editions du CNRS.
- Yogev, P. 1983 A Fifth Millennium B.C.E. Sanctuary in the "Uvda Valley". *Qadmoniot* 16: 118-122.
- Youkana, D. G. 1997 *Tell es-Sawwan: The Architecture of the Sixth Millennium B.C.* London, Nabu Publications.
- Zarins, J. 1989 Pastoralism in Southwest Asia: the Second Millennium B.C.

- In L. Clutton-Brock (ed.), *The Walking Larder*, 127-155. London, Unwin Hyman Ltd.
- 岡田保良 1995 「建築文化初期段階の住居と集落－北メソポタミア・ザグロス地方を中心－」常木晃・松本健編『文明の原点を探る－新石器時代の西アジア』33-48頁 同成社。
- 岡田保良 2000 「古代メソポタミアの宗教建築」田辺勝美・松島英子編『世界美術大全集』(東洋編 16 : 西アジア) 133-148頁 小学館。
- 禿 仁志 1994 「頭骨はいかに取り扱われたか」松本健・常木晃編『日本と世界の考古学－現代考古学の展開－』370-383頁 雄山閣出版。
- 禿 仁志 1995 「祭りと埋葬－パレスチナにおける事例を中心に－」松本健・常木晃編『文明の原点を探る』118-145頁 同成社。
- 小泉龍人 2001 『都市誕生の考古学』同成社。
- 小林文次 1959 『建築の誕生－メソポタミアにおける古拙建築の成立と展開－』相模書房。
- ダメルジ, M. S. B. (高世富夫・岡田保良編訳) 1987 『メソポタミア建築序説－文と扉の建築術－』国士館大学イラク古代研究所(原著は、Damerji, M. S. B. 1973 *Die Entwicklung der Tür und Torarchitektur in Mesopotamien*. Ph.D. Thesis, Universität München.)。
- 常木 晃 1994 「ハラフ期のいわゆるトロスについて」岩崎卓也先生退官記念論文集編集委員会編『日本と世界の考古学』403-421頁 雄山閣出版。
- 常木 晃 2002 『ハラフ文化の研究』学位請求論文(金沢大学社会環境科学研究所)。
- 西秋良宏 2002 「北メソポタミア農耕村落の起源－セクル・エル・アヘイマル遺跡第二次発掘調査(2002)－」日本西アジア考古学会編『今よみがえる古代オリエント』(2001) 第9回西アジア発掘調査報告会報告集』10-11頁。
- 藤井純夫 1998a 「ヨルダン南部砂漠地帯における石器製作場－カア・アブ・トレイハ－」古代オリエント博物館編『古代オリエントを掘る 第5回西アジア発掘調査報告会』28-34頁。
- 藤井純夫 1998b 「肥沃な三日月地帯の外側－ヒツジ以前・ヒツジ以後の内陸部乾燥地帯－」『岩波講座 世界歴史』(第2巻:古代オリエント) 28-34頁 岩波書店。
- 藤井純夫 1999a 「肥沃な三日月弧の外側－カア・アブ・トレイハ西遺跡の第二次発掘調査－」古代オリエント博物館編『古代オリエントを掘る 第6回西アジア発掘調査報告会』25-32頁。
- 藤井純夫 1999b 「[群れ単位の家畜化]説－西アジア考古学との照合－」『民族学研究』第64巻1号 28-56頁。
- 藤井純夫 2000a 「乾燥地考古学の諸問題－初期遊牧民の考古学的可視性－」『沙漠研究』第10巻4号 259-268頁。
- 藤井純夫 2000b 「新石器時代の町イエリコの周壁」『考古学雑誌』第85巻3号 1-36頁。
- 藤井純夫 2001a 「肥沃な三日月弧の外側－カア・アブ・トレイハ西遺跡の第三次発掘調査－」日本西アジア考古学会編『古代オリエント世界を掘る 第7回西アジア発掘調査報告会報告集』25-32頁。
- 藤井純夫 2001b 「沙漠から見たメソポタミア」日本西アジア考古学会編『メソポタミアと周辺地域－西アジアにおける中心と周縁－』(日本西アジア考古学会定例研究会発表資料集2)。
- 藤井純夫 2001c 「ムギとヒツジの考古学」同成社。
- 藤井純夫 2002a 「沙漠の「擬集落」－カア・アブ・トレイハ西遺跡の第四次調査－」日本西アジア考古学会編『今よみがえる古代オリエント』(2001) 第8回西アジア発掘調査報告会報告集』105-110頁。
- 藤井純夫 2002b 「沙漠の「擬集落」－カア・アブ・トレイハ西遺跡の第五次調査－」日本西アジア考古学会編『今よみがえる古代オリエント』(2001) 第9回西アジア発掘調査報告会報告集』14-15頁。
- 藤井純夫 2002c 「群れごとの家畜化仮説－カア・アブ・トレイハとの照合－」日本西アジア考古学会編『西アジアの動物』(日本西アジア考古学会定例研究会発表資料集3) 41-50頁。
- 藤井純夫 2003 「先史遊牧民のネクロポリス－ヨルダン、カア・アブ・トレイハ西遺跡の第6次調査－」日本西アジア考古学会編『今よみがえる古代オリエント』第10回西アジア発掘調査報告会報告集』37-44頁。
- 松本 健 1988 「メソポタミアにおけるウバイト期の建築」『考古学雑誌』第73巻3号 54-76頁。
- 松本 健 1995 「都市文明への胎動」松本健・常木晃編『文明の原点を探る』182-200頁 同成社。

ABBREVIATIONS

ADAJ: Annual of the Department of Antiquities of Jordan.*AJA*: American Journal of Archaeology.*BASOR*: Bulletin of American School of Oriental Research.*IEJ*: Israel Exploration Journal.*PEQ*: Palestine Exploration Quarterly

図版引用文献(図4～7)

図4. 先土器新石器文化Aの防風壁

図5. 先土器新石器文化Bの防風壁

20. Flannery 1972: Fig. 5. (原図は Braidwood et al. 1983: Fig. 51)
21. Hole et al. 1969: Fig. 9.
図6. 後期新石器文化の防風壁
1. Garfinkel and Miller 2002: Fig. 2.11.
2. Galili 1987: Fig. 6.
3. Simmons 2001: Fig. 2. (一部のみ抜粋)
4. Rollefson 1997: Fig. 9. (一部のみ抜粋)
5. Betts and Helms 1987 Fig. 3.
6. Betts 1982: Fig. 8.
7. Fujii 2001: Fig. 3 を基に作成.
8. Margueron 1989: Fig. 5. (一部のみ抜粋)
9. Forest 1996: Fig. 49.
10. Safar et al. 1981: Fig. 39.
11. Voigt 1986: Fig. 15.
12. Llyod and Safar 1945: Fig. 36.
13. Kubba 1987: Fig. 67. (原図は Akkermans et al. 1983: Fig. 6)
14. Merpert et al. 1976: Plate VI-1.
15. Tobler 1950: Pl. XVIII. (一部のみ抜粋)
16. Seeden 1982: Fig. 79.
17. Watkins 1987: Fig. 4.

- 図7. 銅石器時代の防風壁
1. Eisenberg et al. 2001: Plan 3.8.
2. Porath 1985: Fig. 7; 1992: Fig. 1.
3. Ben-Tor 1992: Fig. 1, 5-10; Amiran 1978: Fig. 1.
4. Kempinski 1992: Fig. 1.
5. Betts 1992: Fig. 2.
6. Beit-Arieh 1978: Fig. 4.
7. Beit-Arieh 1981: Fig. 6.
8. Cohen and Dever 1980: Fig. 6. (本図は Cohen 1999: Fig. 129)
9. Roaf 1989: Fig. 1.
10. Forest 1996: Fig. 55. (原図は Roaf 1982: Fig. 30)
11. Forest 1996: Fig. 52. (原図は Egami 1959: Fig. 47)
12. Forest 1996: Fig. 54. (原図は Forest-Foucault 1980: Fig. 2)
13. Forest 1996: Fig. 57. (原図は Jasim 1985: Fig. 2)
14. Jasim 1985: Fig. 229. (一部のみ抜粋)
15. Speiser 1935: Pl. XI. (一部のみ抜粋)
16. Safar et al. 1981: Fig. 39.
17. Kubba 1987: Fig. 120. (原図は Tobler 1950: Pl. VII)
18. Kubba 1987: Fig. 148. (原図は Tobler 1950: Pl. XXII)
19. Jasim 1985: Fig. 229. (一部のみ抜粋)

(追記) 本稿脱稿後(2003年6月)、ジャフル盆地の2003年度発掘調査によって、防風壁の新たな資料が発見された。前期青銅器時代の環状シスト墓(WBs-CE1 & WBs-CE1-2)に付帯する両袖タイプの防風壁が、それである(藤井純夫2004「ヒツジ遊牧の成立と展開—ヨルダン、ジャフル盆地の総合調査(2003年度)」『第11回西アジア発掘調査報告集』図6)。本資料によって、両袖タイプの防風壁がバーディアで永く用いられたことが再確認された。

藤井純夫
金沢大学文学部
Sumio FUJII
Kanazawa University